



S E 201・S K 201・S K 202出土遺物

VIII 中田遺跡第36次調査 (NT97-36)

例 言

1. 本書は、八尾市刑部1丁目、中田2丁目地内で実施した公共下水道（8-13工区）工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する中田遺跡第36次調査（NT97-36）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋328-3号 平成8年9月30日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成9年5月27日から平成9年7月24日（実働13日）にかけて西村公助を担当者として実施した。調査面積は28㎡を測る。なお、調査においては岩沢玲子、坂田典彦、中西明美、西村和子、西岡千恵子が参加した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測-西村（公）・中西、図面レイアウト トレーサー-中西、西村（公）が行った。
1. 本書の執筆、編集は西村が行った。

本文目次

第1章 はじめに	111
第2章 調査概要	112
第1節 調査の方法と経過	112
第2節 検出遺構と出土遺物	113
第3章 まとめ	117

挿 図 目 次

第1図	調査地周辺図	111
第2図	1区周辺図	113
第3図	1区平面図	113
第4図	1区壁面図	113
第5図	1区2層(1)出土遺物実測図	114
第6図	2区周辺図	114
第7図	2区平面図	114
第8図	2区壁面図	114
第9図	2区2層(2)SK-201(3)出土遺物実測図	115
第10図	3区周辺図	116
第11図	3区平面図	116
第12図	3区壁面図	116

表 目 次

第1表	中川遺跡調査一覧表	112
-----	-----------	-----

図 版 目 次

図版一	1区2層上面全景(南から)	1区北壁(南から)
	2区調査地周辺(北から)	2区3層上面全景(南から)
	2区内壁(東から)	2区北壁(南から)
図版二	2区SK-201遺物出土状況(南から)	3区調査地周辺(北から)
	3区4層上面全景(西から)	3区東壁(西から)
	1区2層(1)2区SK-201(2)出土遺物	

第1章 はじめに

八尾市の中央部に位置する中田遺跡は、南東から北西方向に流れる旧大和川の主流であった長瀬川の右岸の沖積地上に位置する。同遺跡は、現在の行政区画では、中田・刑部・八尾木北にかけて存在している。今回の調査地である刑部1丁目、中田2丁目は中田遺跡内の北東部にあたる。

当遺跡の周囲には、北に弥生時代中期以降近世に至るまでの集落遺構が検出されている小阪合遺跡、西に弥生時代後期の集落遺構を検出している矢作遺跡、南に弥生時代中期から近世に至るまでの集落遺構を検出している東弓削遺跡が隣接している。

中田遺跡は昭和45年に行なわれた区画整理事業でその存在が確認され、昭和46年以降大阪府教育委員会・中田遺跡調査会・中田遺跡調査センター^{注1}・八尾市教育委員会（以下市教委と記載）・八尾市文化財調査研究会（以下当研究会と記載）によって数十件の調査が実施している。その結果、弥生時代前期～近世に至る遺構・遺物が検出され、当遺跡が複合遺跡であることが判明した。

なかでも、今回の調査地（1区）の南約30m地点では当研究会が下水道工事に伴う発掘調査（NT92-15）を行っており、弥生時代後期の遺物包含層を検出している。また、2区の南西約



第1図 調査地周辺図

第1表 中田遺跡調査一覧表

調査地点	調査主体(番号)	所在地	面積(m ²)	調査原因	調査期間	文 献	備 考
①	研究会 (NT87-01)	中田1-29・39	100	共同住宅建設	880222~ 880511	1988.12 八尾市文化財調査研究会 報告16 八尾市文化財調査研究会	
②	研究会 (NT90-06)	八尾本北3・刑部2	180	公共下水道	910108~ 910216		
③	研究会 (NT91-07)	八尾本北3-340地	90	共同住宅建設	910517~ 910527	1992 ⑧八尾市文化財調査研究会34 ⑧八尾市文化財調査研究会	
④	研究会 (NT92-12)	中田2-405	120	共同住宅建設	930119~ 930130		
⑤	研究会 (NT92-15)	刑部2	35	公共下水道	930308~ 930415	1997 ⑧八尾市文化財調査研究会報告 56 ⑧八尾市文化財調査研究会	
⑥	研究会 (NT94-28)	刑部2	20.96	公共下水道	941118~ 941295	1996.3 ⑧八尾市文化財調査研究会報 告40 ⑧八尾市文化財調査研究会	
⑦	研究会 (NT95-30)	刑部2	56	公共下水道	950920~ 1013		
⑧	研究会 (NT95-31)	刑部1-183・184	120	共同住宅建設	951106~ 1115		
⑨	研究会 (NT97-36)	刑部1丁目・中田2 丁目	28	公共下水道	H970527~		今回の調査地
⑩	市教育委員会	青山町3・中田5他		遺跡確認履歴	740726~ 740903	1975.3 中田遺跡・中田遺跡調査報告 Ⅱ 八尾市教育委員会	
⑪	市教委 (91-903)	中田5-75-107	16	公共下水道	920109・27		
⑫	市教委 (95-149)	刑部1-183, 184			951018	1995.3 八尾市文化財調査報告33 八 尾市教育委員会	当研究会(NT 95-31)調査地
⑬	市教委 (96-467)	刑部2-177			961114	1997.3 八尾市文化財調査報告36 八 尾市教育委員会	
⑭	市教委 (95-22)	刑部2		公共下水道	951128・ 960125・26	1997.3 八尾市文化財調査報告37 八 尾市教育委員会	

10m地点では当研究会が共同住宅建設に伴う発掘調査(NT95-31)を行っており、弥生時代後期と古墳時代後期の上坑・溝などを検出している。さらに3区の東側では当研究会が共同住宅建設に伴う発掘調査(NT87-1)を行っており、弥生時代後期の井戸や溝、落込みなどを検出し、遺物も弥生時代後期を中心に古墳時代と中世および近世のものが出土している。

第2章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

今回の調査は、公共下水道工事(8-13工区)に伴って破壊される立坑3箇所を対象に実施した。今回の工事掘削の最も南側に存在している掘削地点を1区とし、以下北に存在している掘削位置を2区・3区と名付けた。1区は現地表面から1.2mまでを機械により掘削し、以下0.3mは人力掘削による調査を実施した。2区は現地表面から1.4mまでを、3区は現地表面から1.5mまでを機械により掘削し、その下の0.6mまでの深さについては人力と機械掘削により調査を実施した。また各調査区では工事掘削最終深度までの地層の堆積状況について確認を行った。

調査の結果、1区では現地表下約1.4m(T.P.+9.1m)で古墳時代中期以前の河川の堆積層を確認し、2区では現地表下約1.6m(T.P.+8.8m)で弥生時代後期の土坑を1箇所(SK-201)検出した。3区では現地表下約1.8m(T.P.+8.7m)の4層上面で調査を実施したが、遺構の検出はなかった。以下調査区毎に検出遺構と出土遺物の概要を記載する。

第2節 検出遺構と出土遺物

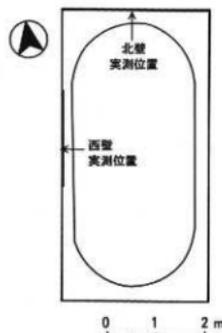
1区

立坑部分の調査区で、堆積層は3層を確認した。0層は盛土で、1.2mの厚みを測る。現在の地表面の標高は、T.P.+10.4mである。1層は粘土で、層内からは土師器および須恵器の破片が極少量出土した。2層上面は細砂の中にシルトや粘土が混じり攪拌をうけ、土壌化している。この層の上面で調査を行ったが遺構の検出はなかった。しかし2層の上面からは、円筒埴輪(1)が出土した。埴輪は土師質で、径約45.6cmを測る。タガの断面は台形で、幅2.8cm、高さ0.8cmを測る。破片であるため透かしの穴は確認できなかった。内外面の調整は表部が磨耗しているため不明である。内面に粘土接合痕が残る。

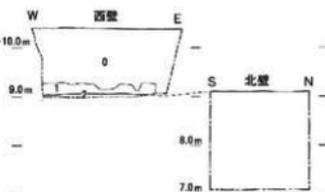
面的な調査を終了した後、工事掘削の最終の深さまでの堆積層について確認を行った。この調査区では2層の細砂が厚み2.0m以上にわたり全面に堆積していることが確認できた。この層は古墳時代前期以前の河川の堆積土であると推定される。



第2図 1区周辺図

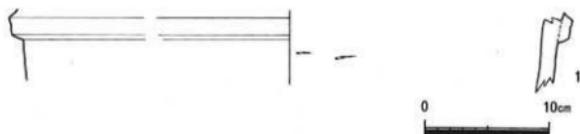


第3図 1区平面図



- 第0層 盛土 現地表T.P.+10.4m
 第1層 7.5Y R4/1 桃灰色極粗砂混粘土
 第2層 7.5Y R4/3 褐色細砂混粗砂

第4図 1区壁面図



第5図 1区2層(1)出土遺物実測図

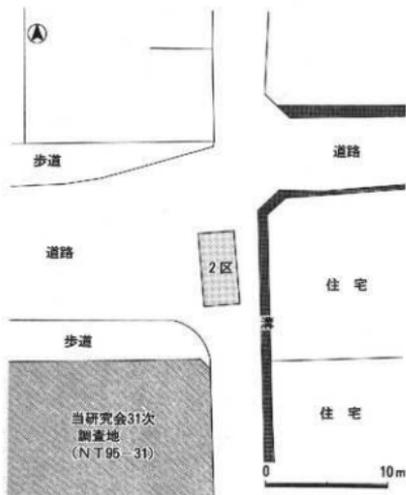
2区

立坑部分の調査区で、堆積層は10層を確認した。0層は盛土で、厚みは1.2mを測る。現在の地表面の標高は、T.P.+10.4mである。以下には1層の砂、2層の粘土が堆積していた。2層内からは鎌倉時代に比定できる瓦器椀(2)が出土した。瓦器椀は見込みに格子の暗文を施す。高台は断面三角形の形状で径6.0cmを測る。3層上面は土壌化を受けており、上面で土坑1基(SK-201)を検出した。

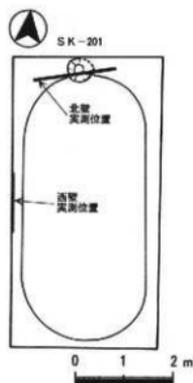
SK-201

調査区内の北端の壁際に検出した。検出した平面の形状は円形で、径0.8mを測る。断面の形状は逆台形で、深さ約0.45mを測る。

埋土は、10BG4/1暗青灰色粘土である。道構内からは口縁部を欠損した弥生時代後期の



第6図 2区周辺図

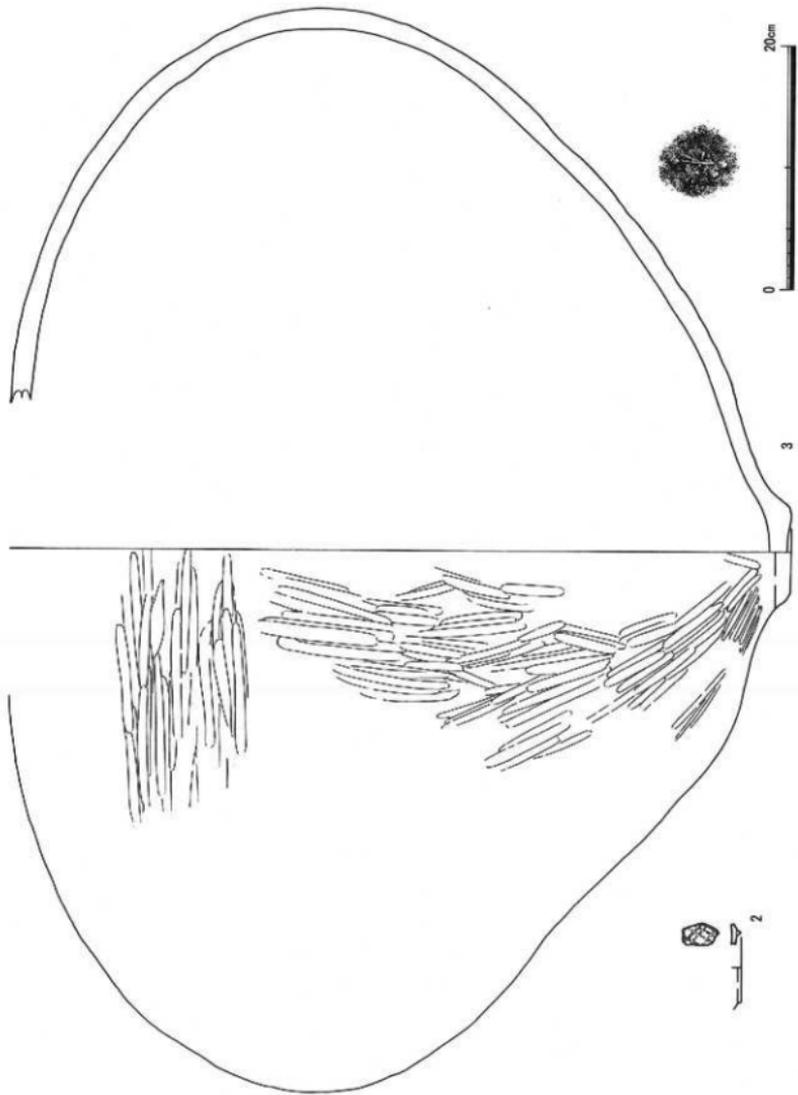


第7図 2区平面図

- 第0層 盛土 現地表面 T.P.+10.4m
- 第1層 10Y7/1 灰白色中砂
- 第2層 5B G5/1 青灰色粘土
- 第3層 5B G3/1 暗青灰色粘土
上面で土坑1基(SK-201)検出
- 第4層 10B G4/1 暗青灰色粘質シルト
- 第5層 5B5/1 青灰色粘土
- 第6層 10B G5/1 青灰色粗砂混細砂
- 第7層 5B6/1 灰青色粘土
- 第8層 10Y R2/1 黒色粗砂混粘土
(植物遗体 炭化物多量に含む)
- 第9層 N4/ 灰色粗砂混細礫



第8図 2区平面図



第9図 2区2層(2)SK-201(3)出土遺物実測図

大型の壺(3)が出土した。この壺は遺構の底面に突出した底部を下にして置いていた。壺は現存高47.4cm、体部最大幅66.6cmを測る。外面は下位が縦方向、上位が横方向のヘラミガキを施す。底面に木の葉の跡が残る。

面的な調査を終了した後、工事掘削の最終の深さまでの堆積層について確認を行った。結果、4層～9層が堆積していることが判明したが、何れの層からも遺構の検出および遺物の出土はなかった。9層は厚み約1.2m以上を測る礫層で、時期の詳細は不明であるが弥生時代以前の川が存在していたと思われる。

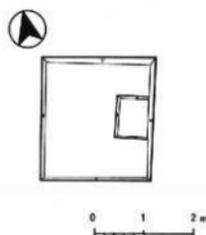
3区

人孔部分の調査区で堆積層は6層を確認した。現在の地表面の標高はT.P.+10.5mである。現地表面から1.0mまでの厚みで盛土が存在している。1層は旧耕作土である。2層は粗砂で、時期は不明であるが河川の氾濫による洪水堆積層と推定できる。3層は粘土で、上面はやや攪拌を受けている。この粘土層は水田と言い切る根拠には乏しいが、上面の攪拌の状況や土質から、水田の可能性も考えたい。4層は粘土層で、上面は土壌化を受けている。上面で調査を行ったが遺構の検出はなかった。

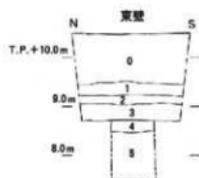
面的な調査を終了した後、工事掘削の最終の深さまでの堆積層について確認を行った。結果、厚み約1.0m以上のシルト混粘土(5層)を確認したが、遺構の検出および遺物の出土はなかった。



第10図 3区周辺図



第11図 3区平面図



- | | | |
|-----|----------|---------------|
| 第0層 | 盛土 | 現地表T.P.+10.5m |
| 第1層 | 10B G4/1 | 暗青灰色粗砂混粘土 |
| 第2層 | N4/ | 灰色中砂混極粗砂 |
| 第3層 | 5B4/1 | 暗青灰色粘土 |
| 第4層 | 5B G4/1 | 暗青灰色粘土 |
| 第5層 | N4/ | 灰色シルト混粘土 |

第12図 3区壁面図

第3章 まとめ

1区では遺構の検出はなかった。しかし、古墳時代中期頃の埴輪の破片を検出していることや、南西約200m地点のNT95-30調査地(周辺図⑦)でも古墳時代中期から後期の埴輪が出土していることから、付近に古墳が存在している可能性が高いと推定される。

2区の南西約10m地点のNT95-31調査地(周辺図⑧)では、弥生時代後期と古墳時代後期の土坑・溝等を検出しており、今回の調査地にも同時代の集落が広がっていることがわかった。

3区では遺構の検出および遺物の出土はなかった。しかし今回の調査地の2区やNT87-1調査地(周辺図①)、NT95-31調査地(周辺図⑧)で弥生時代後期の集落を検出していることから、周囲にはおそらく同時代の集落が存在していると推定される。

註

- 註1 1974.5『中田遺跡』中田遺跡調査報告Ⅰ 日本電信電話公社大阪地区管理部地下線埋設工事に伴う調査
中田遺跡調査センター
1975.3『中田遺跡』中田遺跡調査報告Ⅱ 昭和49年度国庫補助事業中田遺跡範囲確認調査 八尾市教育委員会
- 註2 西村公助1997年「Ⅰ 中田遺跡15次調査」『財団法人 八尾市文化財調査研究会報告56』財団法人 八尾市文化財調査研究会
- 註3 原田昌則1996年「Ⅵ 中田遺跡31次調査」『財団法人 八尾市文化財調査研究会報告54』財団法人 八尾市文化財調査研究会
- 註4 成海佳子1988年「中田遺跡1次調査」『八尾市文化財調査研究会年報 昭和62年度』財団法人 八尾市文化財調査研究会報告16
- 註5 坪田真一1996年「23.中田遺跡第30次調査 (NT95-30)」『平成7年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人 八尾市文化財調査研究会

圖 版



1区2層上面全景（南から）



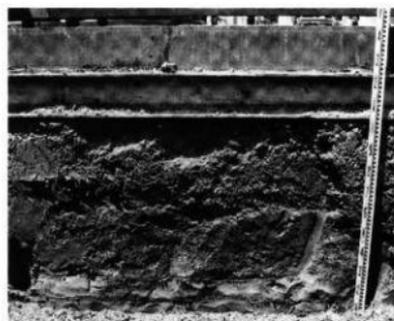
1区北壁（南から）



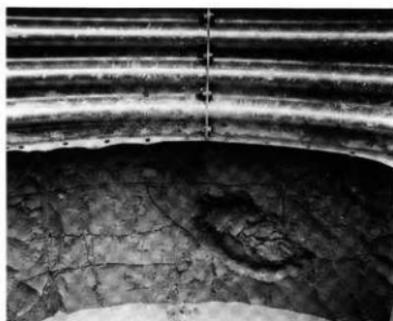
2区調査地周辺（北から）



2区3層上面全景（南から）



2区西壁（東から）



2区北壁（南から）



2区SK-201遺物出土状況(南から)



3区調査地周辺(北から)



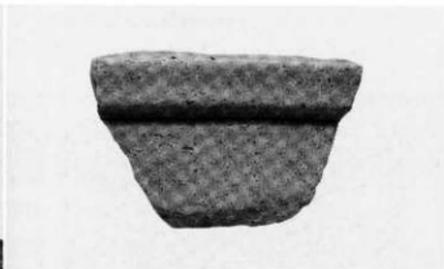
3区4層上面全景(西から)



3区東壁(西から)



1区2層(1)2区SK-201(2)出土遺物



1区2層(1)2区SK-201(2)出土遺物

IX 中田遺跡第37次調査 (NT97-37)

例 言

1. 本書は大阪府八尾市刑部3・4丁目地内で実施した公共下水道工事（8-30T区）に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する中田遺跡第37次調査（NT97-37）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会作成の指示書（八教社文第理第29-2号 平成9年4月21日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成9年8月5日～8月20日（実働10日間）にかけて、古川晴久を担当者として実施した。調査面積は約80㎡である。現地調査においては朝田 要・垣内洋平・岸田靖子・藤澤忠裕が参加した。
1. 内業整理は現地調査終了後随時行い、平成11年9月に終了した。
1. 本書作成に関わる業務には、遺物実測-中前和代・村井俊子、図面トレース-北原清子・佐藤光子・村田知子、遺物写真-古川が行った。
1. 本書の執筆・編集は、古川が行った。

本文目次

第1章 はじめに	119
第2章 調査概要	120
第1節 調査の方法と経過	120
第2節 調査成果	120
〈1区〉	120
〈2区〉	126
〈3区〉	126
〈4区〉	126
〈5区〉	127
〈6区〉	127
〈7区〉	128
第3章 まとめ	129
付記 資料紹介	130

挿 図 目 次

第1図	調査地周辺図 (S=1/2500)	119
第2図	1区~3区位置図 (S=1/400)	120
第3図	1区平断面図 (S=1/200)	122
第4図	S P105出土遺物実測図 (S=1/4)	123
第5図	第2面出土遺物実測図 (S=1/4)	124
第6図	第3層出土遺物実測図 (S=1/4)	125
第7図	3区土層断面図 (S=1/40)	126
第8図	4区土層断面図 (S=1/40)	127
第9図	5区土層断面図 (S=1/40)	127
第10図	6区土層断面図 (S=1/40)	127
第11図	7区平断面図 (S=1/40)	128
第12図	5~7区出土遺物実測図 (S=1/4)	129
第13図	中田遺跡出土蛸壺実測図 (S=1/4)	130

写 真 目 次

写真1	7区調査風景 (東から)	128
-----	--------------------	-----

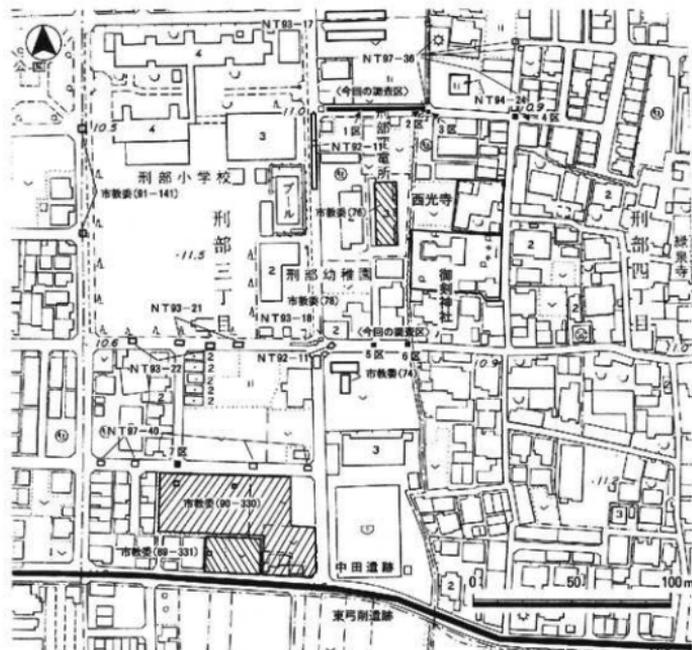
図 版 目 次

図版一	1区第1面S P102 S P102上層断面 (東から) 1区 (1E地区) 第1面S P105 (北から) S P105礎石 1区 (1E区) 第1面遺構 (東から) 1区調査風景 (南東から)
図版二	1区 (1C地区) 第2面S D203 (北から) S D203遺物出土状況 1区 (1F地区) 第2面S D204 (南から) S D204遺物出土状況 1区 (1D地区) 第3層内遺物出土状況 1区調査風景 (東から)
図版三	2区土層断面 (北から) 3区土層断面 (北から) 4区土層断面 (西から) 5区土層断面 (南から) 7区調査風景 (東から) 7区土層断面 (東から)
図版四	S P105 (1)、S D202 (2・3)、S D203 (4~8) 出土遺物
図版五	S D204 (9~11)、第3層 (12~15) 出土遺物
図版六	第3層出土遺物 (16~18・20・21)、5区 (22・23) 出土遺物
図版七	6区 (24)、7区 (25~31) 出土遺物、表採資料 (32)

第1章 はじめに

中田遺跡は八尾市のはば中央部に位置し、現在の行政区画では中田1～5丁目、刑部1～4丁目、八尾木1～6丁目にかけて所在する。当遺跡は地理的に旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川にはさまれた低位沖積地にある。当遺跡の北に小阪合遺跡、西に矢作遺跡、南に東弓削遺跡が位置する。(第1図参照)

当遺跡は昭和45年(1970年)度実施された区画整理事業に伴う発掘調査でその存在が明らかとなった。その後、電気管路埋設・河川改修そして公共下水道工事に伴い数次にわたる発掘調査が大府教育委員会・中田遺跡調査会・八尾市教育委員会・当調査研究会によって実施されている。その調査成果から弥生時代前期～中世にわたる複合遺跡として認識されている。今回の調査地周辺で実施された調査成果によると、調査地北部に位置する当調査研究会第17次調査において弥生時代後期前半に比定される土器集積内から吉備(岡山県)地方の特殊器台の特徴を有する大型装飾器台が出土している。また、八尾市立刑部小学校の南東地点で昭和54年度に市教育委員会によって実施された発掘調査で古墳時代初頭に比定される溝状遺構(刑部土坑)内から70個体以



第1図 調査地周辺図 (S=1/2500)

上にのぼる吉備系土器群が一括で出土している。中田遺跡では古墳時代初頭を中心として吉備地方に関連した遺物が数多く検出されており、当時の河内地方と吉備地方との交流を物語る資料として注目される。

第2章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

今回の調査は公共下水道工事（8-30工区）の管路・人孔部分掘削に伴うもので当調査研究会が中田遺跡内で実施した第37次調査にあたる。調査地は東西に細長い管路部分（長さ50m・幅1.4m）1箇所と人孔部分（東西幅1.7~2.2m・南北幅1.4~2.2m）6箇所の計7箇所である。調査は管路部分→人孔部分の順に進めた。掘削については八尾市教育委員会作成の埋蔵文化財調査指示書に基づき、現地表（T.P.+10.8m）から約1.0~1.5m前後については重機により掘削した。それ以下約1.0~1.5mについて人力掘削を中心に行い、状況に応じて機械掘削を併用した。なお、今回の調査はオープンカット工法によるもので、しかも調査面積が狭く、調査地が既設の埋設物による地質の改変を受けている可能性が高いため安全面を考慮して、現地表下から2.0mまでを調査の対象とした。今回の調査区は各所に点在しており、調査を実施した順番にならって調査区名（1区~7区）をつけた。（第1図参照）

1区の管路部分については、東西に伸びるので調査区南西端付近を基点に5mごとの任意の基準点を設置し遺構・遺物の検出を行った。（第2図参照）



第2図 1区~3区位置図（S=1/400）

第2節 調査成果

〈1区〉

1. 層序

1区の管路部分の土層断面図については、北壁のみを実測している。1区で全体的にみられる7層を選んで基本層序とした。なお、後に述べる2区の上層についても1区の基本層序と対応させている。以下に層名の一覧を挙げる。（第3図参照）

第1層 現代盛土。

第2層 5B4/1暗青灰色粘土質シルト。（耕土層）

- 第3層 10YR6/1褐灰色砂質シルト。弥生時代～近世にかけての遺物を多く含む。
- 第4層 7.5Y6/1灰色粘土質シルト。鉄分が沈着している。弥生時代後期～古墳時代後期の遺物を含む。(上面が第1面)
- 第5層 2.5Y6/3灰黄色粘土質シルト。鉄分沈着が著しい。粘性が強い。(上面が第2面)
- 第6層 2.5Y6/1灰黄色粘土質シルト。(下層確認)1G区から東は2.5Y6/1灰黄色粗砂である。
- 第7層 5B5/1青灰色粘土質シルト。しまりが強い。(下層確認)

2. 検出遺構と出土遺物

第1面

第1面は第4層上面のT.P.+9.5m前後で主に平安時代後半とみられる溝3条(SD101～SD103)・小穴1個(SP102)、時期不明の小穴4個(SP101・SP103～SP105)を確認した。調査区西端の1A～1Eにおいて遺構を確認している。

SD101

SD101は1A～1B区で検出した。調査区を南東から北西に伸びており検出部分で幅1.3～3.0m、深さ0.3mを測る。埋土は2.5Y6/3にぶい黄色粘土質シルトの単一層でややしまりがあり、鉄分沈着が著しい。遺物は弥生土器・土師器・瓦器が出土したがいずれも小片のため図化できなかった。SD101の埋没した時期は平安時代後期とみられる。

SD102

SD102は1B区で検出した。調査区をほぼ南北方向に伸びる細長い溝である。検出部分で幅0.2～0.3m、深さ0.1mを測る。埋土は10YR6/2灰黄褐色粘土質シルトの単一層でややしまりがある。遺物は弥生土器・土師器が出土したがいずれも小片のため図化できなかった。SD102は時期的に平安時代後期とみられる。

SD103

SD103は1B～1C区で検出した。調査区をほぼ南北方向に伸びる細長い溝である。検出部分で幅1.0～1.3m、深さ0.2mを測る。埋土は2.5Y6/3にぶい黄色粘土質シルトの単一層でややしまりがある。遺物は土器片が極少量出土したが時期は明確に示すものはない。

SP101

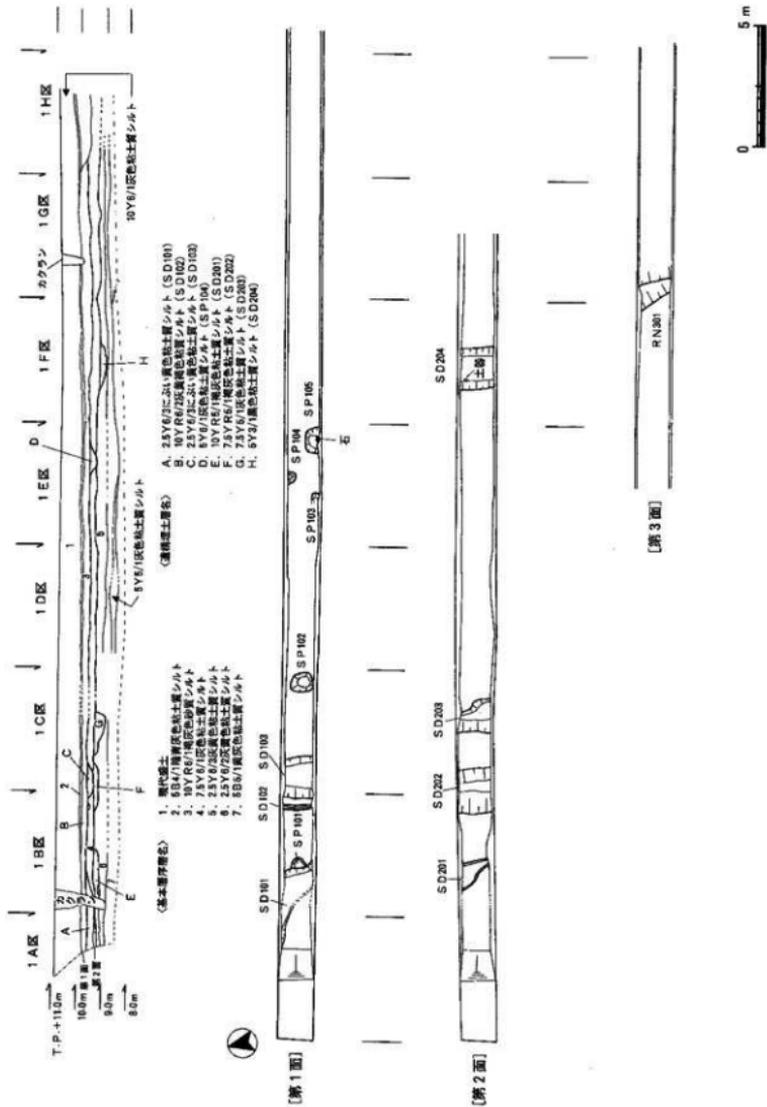
SP101は1B区で検出した。SD101により一部切られている。SP101は平面形が楕円形で長さ0.4～0.6m、深さ0.1mを測る。断面形状が楕形をしている。埋土は2.5Y6/3にぶい黄色粘土質シルトの単一層である。出土遺物はなし。

SP102

SP102は1C区で検出した。SP102は平面形が隅丸方形で1辺0.8～1.0m、深さ0.1mを測る。断面形状は浅い楕形をしている。埋土は柱痕とみられる第1層と掘形埋土の第2層からなる。遺物は弥生土器・土師器が極少量出土したがいずれも小片のため図化できなかった。しかし、SP102は土師器の特徴などから平安時代後期に比定される。

SP103

SP103は1E区で検出した。SP103は西側掘形ラインが判然としないが平面形が楕円形とみられ南北幅0.3m、深さ0.1mを測る。断面形状は浅い楕形をしている。埋土はSP101と同じである。出土遺物はなし。



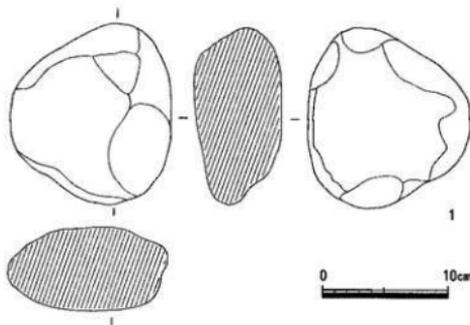
第3図 1区平断面図 (S = 1/200)

SP104

SP104は1E区で検出した。SP104は北側掘形ラインが調査区外に至るため全容は不明だが東西幅0.5m、深さ0.2mを測る。断面形状は楕形をしている。埋土は5Y6/1灰色粘土質シルトの単一層である。出土遺物はなし。

SP105

SP105は1E区で検出した。SP105は南側掘形ラインが調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で平面形状が隅丸方形とみられ1辺0.6~1.0m、深さ0.25mを測る。断面形状は逆台形をしている。埋土は炭混じりの5Y6/1灰色粘土質シルトの単一層である。SP105のほぼ中央で礎石に使用されたとみられる石材(1)が1点出土した。(1)は長さ0.3m、厚さ0.2mを測り平面形が不整形で片面に平滑な面をもっている。材質は花崗岩とみられる。その他の出土遺物は奈良時代以降とみられる須恵器の小片が1点出土している。



第4図 SP105出土遺物実測図 (S=1/4)

・第2面

第2面は第6層上面のT.P.+9.2m前後で主に弥生時代後期~古墳時代前期にかけての溝4条(SD201~SD204)を確認した。調査区1A~1C・F区において遺構を確認している。

SD201

SD201は1B区で検出した。SD201はほぼ南北に伸びており、検出部分で幅0.3~1.1m、深さ0.2mを測る。断面形状は浅い楕形である。埋土は10YR5/1褐灰色粘土質シルトの単一層である。層中に若干炭が混じる。遺物は弥生土器(第V様式)・円筒埴輪の小片が極少量出土した。円筒埴輪は上層の混入遺物とみられる。

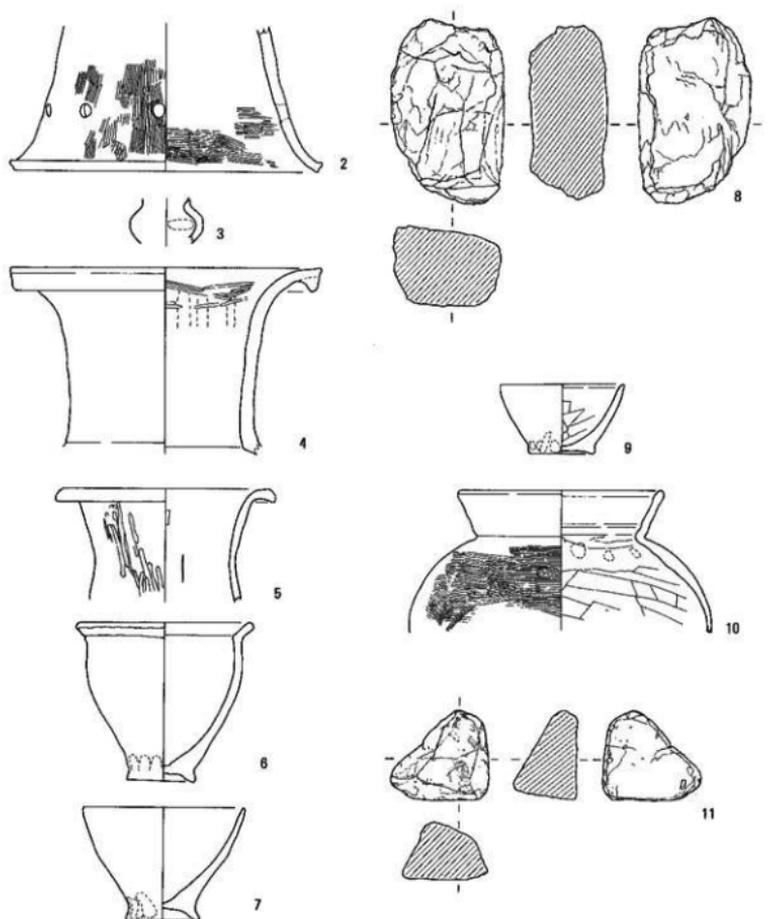
SD202

SD202は1B~C区で検出した。南北方向に伸びており、検出部分で幅約2.0m・深さ0.2mを測る。断面形状は楕形である。埋土は7.5YR5/1褐灰色粘土質シルトの単一層である。SD202内から弥生時代後期前半とみられる遺物が少量出土している。その中で図化できたものは器台(2)と小型の壺(3)のみである。(2)は器台の裾部とみられる。内外面とも粗いハケメを行っており、円形の透かしが確認できる。(2)は山陰の因幡地方でみられる形態と類似しており関連が注目される。胎土から判断すると河内地方で作られたとみられる。(3)は手握ねで作られた小型の壺であり、器高3.5cmを測る。焼成は良好である。

SD203

SD203は1C区で検出した。南北方向に伸びており、検出部分で幅0.8~1.5m、深さ0.3mを

測る。断面形状は皿形である。埋土はややしまりのある7.5Y5/1灰色粘上質シルトの単一層である。SD203内から弥生時代後期前半に比定される遺物が多く出土した。その中で図化できたのは壺2点(4・5)、甕1点(6)、鉢1点(7)、石材1点(8)である。(4)は大型の広口壺で口径25cmを測る。内外面とも表面の剥離が著しい。(5)も広口壺である。(6)は完形品で外



SD202 (2・3)

SD203 (4~8)

SD204 (9~11)



第5図 第2面出土遺物実測図 (S = 1/4)

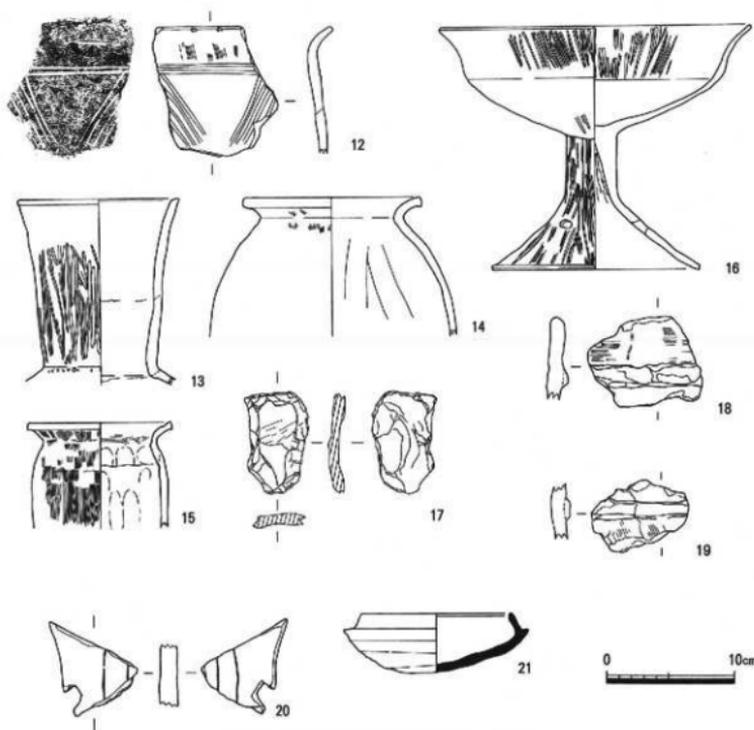
面は全体的に黒色で調整は不明である。底部外側面は指頭圧痕が顕著である。(7)は鉢で比較的大型である。(8)は花崗岩とみられる石材で長さ8.0~14.0cm、厚さ5.0cmを測る。

SD204

SD204は1F区で検出した。南北方向に伸びており、検出部分で幅1.6~1.8m、深さ0.3mを測る。断面形状は皿形である。埋土は5Y3/1黒色粘土質シルトで若干炭が混じる。SD204内から弥生時代後期前半に比定される鉢1点(9)、古墳時代前期後半(布留式期新相)に比定される甕1点(10)、石材1点(11)が出土した。(9)は器高5.5cmを測る。(10)は口縁部~体部にかけて遺存している。(11)は何れの面(5面)も平滑になっており、一部に赤色の付着物が確認できる。

遺物包含層出土遺物

第3層内からは弥生時代前期~平安時代末期を中心とする遺物が出土している。そのうち10点(12~21)を図化した。(12)は弥生時代前期新段階に比定される甕である。甕の体部に沈線で山陽地方にみられる山形の平行斜線文が施されている。胎土は河内地方のものである。(13~15)



第6図 第3層出土遺物実測図 (S=1/4)

は弥生時代後期前半に比定される。(13)は長頸壺で頸部にミガキが密に行われている。(14・15)は甕である。(15)は体部外面に縦方向の細かいハケメが認められる。(16)は高杯で内外面とも灰白色で搬入品の可能性がある。(17)はサヌカイトの剥片である。(18・19)は円筒埴輪で一部ヨコハケが確認できる。タガの断面は退化した形態である。(20)は形象埴輪で衣蓋形埴輪の立ち飾り板の鏝の部分とみられる。(21)は古墳時代後期に比定される須恵器の杯身である。

・第3面

第3面は下層確認調査時(第7層上面)に1F～1G区において自然河川(NR301)を1条確認している。NR301はほぼ南北方向に流路が想定される。NR301の埋没時期は出土遺物がないため不明である。

〈2区〉

2区は1区東端と接しており1辺2.2mの平面形が正方形である。

1. 層序

1区と同じである。

2. 検出遺構と出土遺物

遺構・遺物は検出されなかった。

〈3区〉

3区は2区の4m東に位置しており、1辺1.8mの平面形が正方形である。調査区の1/4は既設の埋設物のため掘削はできなかった。

1. 層序

3区では3層の堆積を確認した。以下に層名の一覧を挙げる。

第1層 盛土。レンガ・バラスを多く含む。

第2層 5Y5/1灰色粘土。粘性強い。層中に近世～近代にかけての国産陶磁器を少量含む。区画整理前の用水路の堆積層とみられる。

第3層 5Y7/1灰白色細粒砂。しまり弱い。1区NR301に対応する可能性がある。湧水が非常に多い。

2. 検出遺構と出土遺物

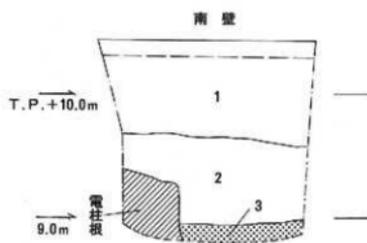
検出遺構なし。遺物は第2層内から近世に比定される国産陶磁器の小片と近代の電柱(木製)1点が出土した。

〈4区〉

4区は3区から約50m東、当調査研究会第24次調査区南東20mの位置にある。1辺2.1mの平面形が正方形であるが、既設埋設物のため実際1辺1.5×1.5m内の面積を調査対象とした。

1. 層序

4区では6層の堆積を確認した。以下に層名の一覧を挙げる。



第7図 3区土層断面図(S=1/40)

- 第1層 盛土。
 第2層 5G4/1小礫混じり粘土質シルト。
 第3層 7.5YR4/2小礫混じり砂質シルト。
 第4層 10YR5/2砂質シルト。
 第5層 2.5Y5/3砂質シルト。
 第6層 10YR5/6細粒砂。

2. 検出遺構と出土遺物

遺構・遺物は検出されなかったが第3層以下は、玉串川左岸の自然堤防の堆積層とみられる。

<5区>

5区は当調査研究会第11次調査区の東約20m東に位置する。5区は1辺1.9mの平面形が正方形である。調査区の南西と東端に既設埋設物があり調査不能であった。

1. 層序

5区では5層の堆積を確認した。以下に層名の一覧をあげる。

- 第1層 盛土。
 第2層 5BG6/1青灰色粘土。グライ化した層である。
 第3層 5Y7/3浅黄色粘土質シルト。
 第4層 10YR5/1褐灰色粘土質シルト。
 第5層 2.5Y6/1黄灰色細粒砂。しまり弱い。

2. 検出遺構と出土遺物

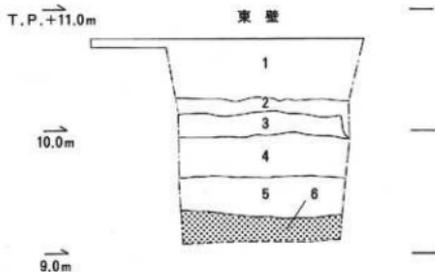
検出遺構なし。遺物は第2層内から形象埴輪2点(22・23)が出土した。(22)は衣蓋形埴輪の立ち飾り板の鱗の部分とみられる。(23)は人物埴輪(巫女?)の可能性ある。

<6区>

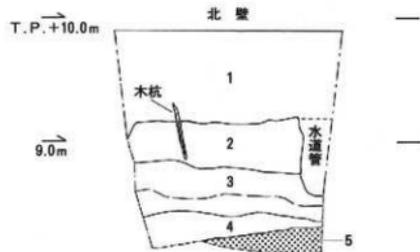
6区は5区から15m東に位置する。6区は1辺1.8mの平面形が正方形である。

1. 層序

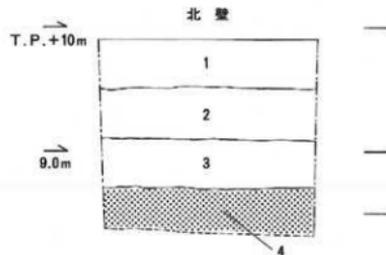
6区では4層の堆積を確認した。以下に層名の一覧を挙げる。



第8図 4区土層断面図 (S = 1/40)



第9図 5区土層断面図 (S = 1/40)



第10図 6区土層断面図 (S = 1/40)

第1層 盛土。

第2層 2.5Y6/2灰黄色粘土。旧水路の埋土とみられる。

第3層 5B5/1青灰色粘土。粘性強い。グライ化している。

第4層 2.5Y6/1黄灰色細粒砂。(河川堆積層?)

2. 検出遺構と出土遺物

現地表下から0.6mで近世以降の用水路を確認した。用水路の埋土内から国産陶磁器の小片が多く出土したが凶化し得たのは(24)1点のみである。

〈7区〉

7区は八尾市教育委員会(90-330)調査区北側、当調査研究会第40次調査2区の東約15mに位置する。調査区北側は用水路の擁壁が現地表から約1.8mにも及んでおり調査不能であった。

1. 層序

7区では7層の堆積を確認した。第1層～第4層は酸化鉄・マンガン斑が優勢な堆積である。

第1層 盛土。

第2層 5GY4/1砂質シルト。小礫が少量混じる。

第3層 10YR5/3砂質シルト。

第4層 10YR5/2砂質シルト。マンガン斑が多くみられる。

第5層 2.5Y5/1黄灰色粘土質シルト。粘性強い。

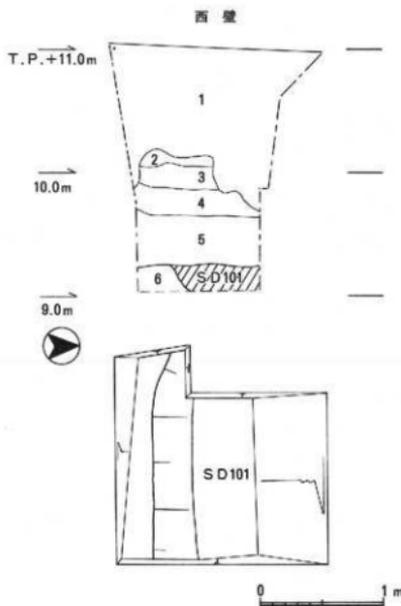
第6層 10G7/1暗緑灰色粘土。

第7層 5BG6/1青灰色粘土。小礫が混じり、粘性強い。

S D101の埋土である。

2. 検出遺構と出土遺物

第6層上面において調査区を東西方向に伸びる溝1条(S D101)検出した。検出部分で最大1.3m、深さ0.2mを測る。断面形状は浅い逆台形をしている。埋土は第7層の単一層である。溝埋土内から古墳時代後期(6世紀中葉～後葉)に比定される土師器・須恵器が多く出土した。その内、凶化したものは土師器壺が1点(25)、須恵器甕1点(26)・杯蓋1点(27)・杯身4点(28～31)である。(25)は長頸壺で体部下

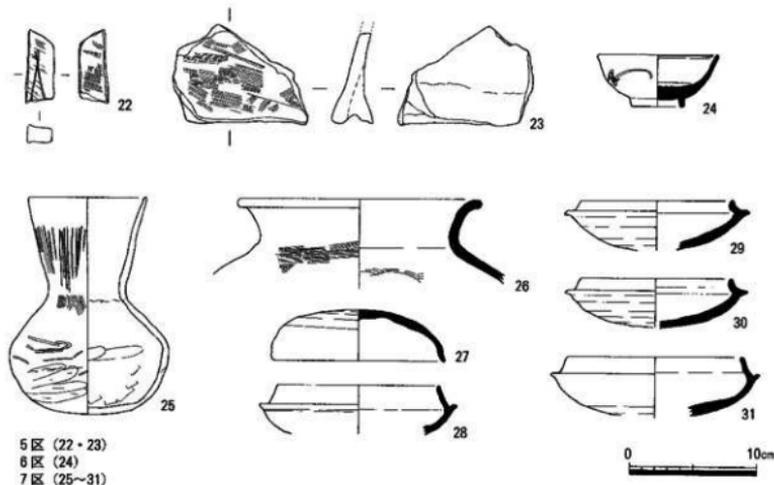


第11図 7区断面図(S=1/40)



写真1 7区調査風景(東から)

半～底部にかけて横方向のヘラケズリを行っている。(26) は内面に一部同心円文タタキが認められる。(27) は全体的に歪んでいる。(27・28・31) は田辺編年 TK10型式に比定される。(29・30) は概ね田辺編年 TK209型式～TK217型式とみられる。今回 7 区で検出した遺構は、当調査研究会第40次調査 2 区検出の SD222 に対応するとみられる。



第12図 5・6・7区出土遺物実測図 (S=1/4)

第3章 まとめ

今回の調査は、小規模な面積にもかかわらず出土遺物量が遺物収納用コンテナ10箱を数えた。1区では3面にわたる遺構を確認した。出土遺物の大半は弥生時代後期前半に比定されるものである。また、包含層内から円筒埴輪・形象埴輪が多く出土している。何れも小片になっていることから判断すると調査地周辺に古墳が存在していた可能性があり注目される。7区では古墳時代後期に比定される遺構・遺物を検出した。7区の南約10mで実施された八尾市教育委員会(90-330)調査の試掘データに対応しており調査区一帯に古墳時代後期頃の集落の拡がりがあるとみられる。

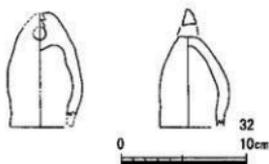
参考文献

- ・高木真光 1981「7.中田遺跡(刑部地区)」『昭和53・54年度埋蔵文化財発掘調査年報』八尾市教育委員会
- ・原田昌則 1998「16.中田遺跡」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告60』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・清 斎 1991「17.中田遺跡(90-330)の調査」『八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書1』八尾市教育委員会
- ・坪田真一 1998「24.中田遺跡(NT97-40)」『平成9年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人 八尾市文化財調査研究会

4、付記

(資料紹介) 中田遺跡出土蛸壺について

本資料は地元の方が今回の調査区近くで採集された蛸壺である。本資料は山上地点が明確でないが八尾市内出土例としては稀少であることから資料紹介として本書において報告する。蛸壺(32)は器高10.0cm、最大径6.0cmを測り、形態は釣鐘状を呈している。焼成は良く、色調は茶褐色を呈している。内面にタテ方向の指ナデが明瞭に残っている。時期的に弥生時代後期の所産とみられる。

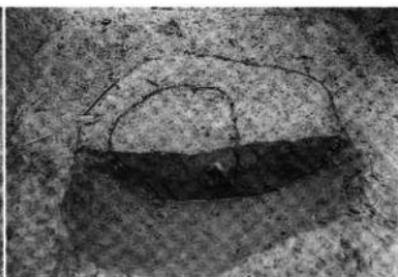


第13図 中田遺跡出土蛸壺実測図
(S = 1/4)

图 版



1区・第1面SP102



SP102土層断面(東から)



1区(1E地区)第1面SP105(北から)



SP105礎石



1区(1E地区)第1面遺構(東から)



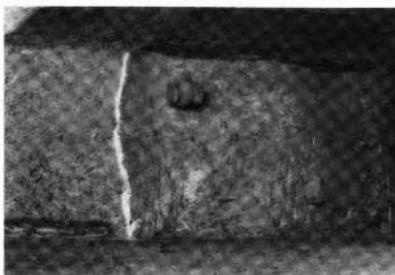
1区調査風景(南東から)



1区（1C地区）第2面S D203（北から）



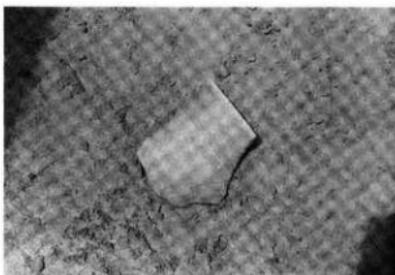
S D203遺物出土状況



1区（1F地区）第2面S D204（南から）



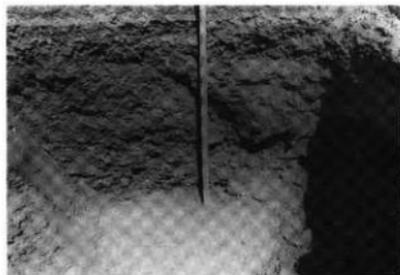
S D204遺物出土状況



1区（1D地区）・第3層遺物出土状況



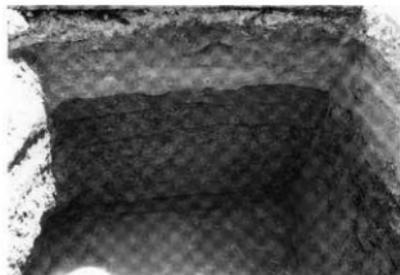
1区・調査風景（東から）



2区・土層断面（北から）



3区・土層断面（北から）



4区・土層断面（西から）



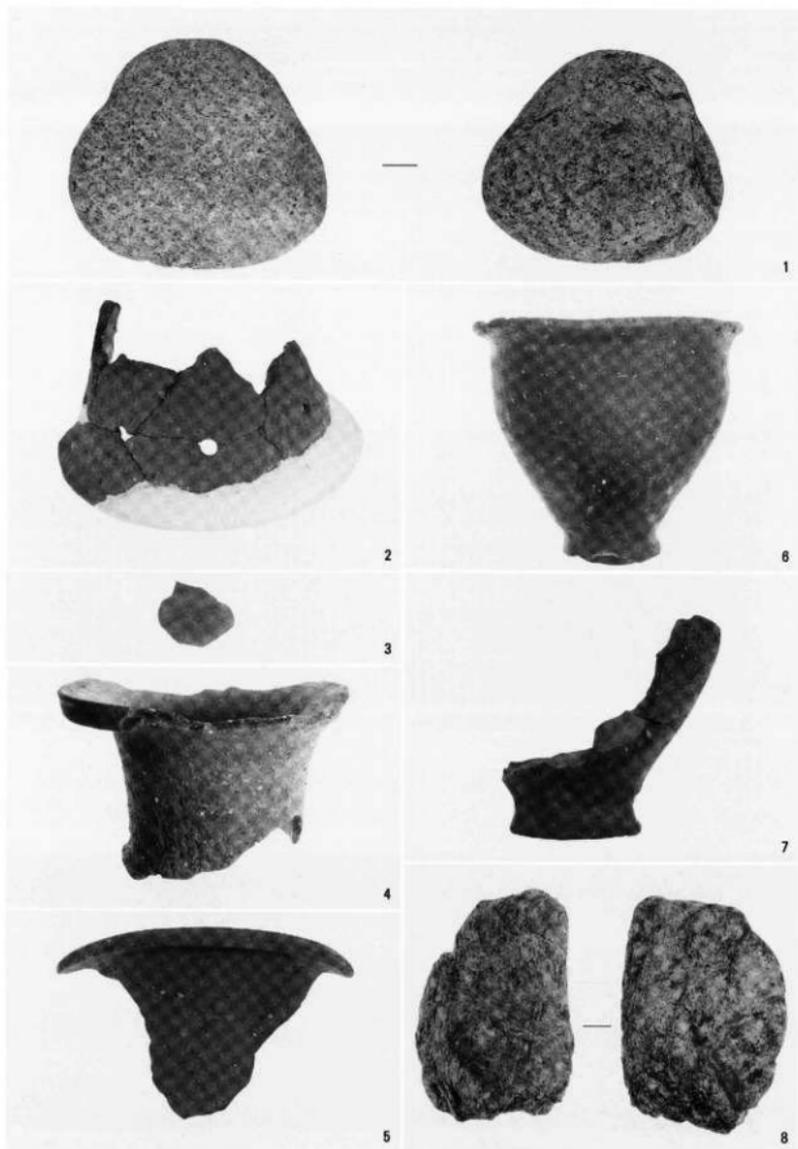
5区・土層断面（南から）



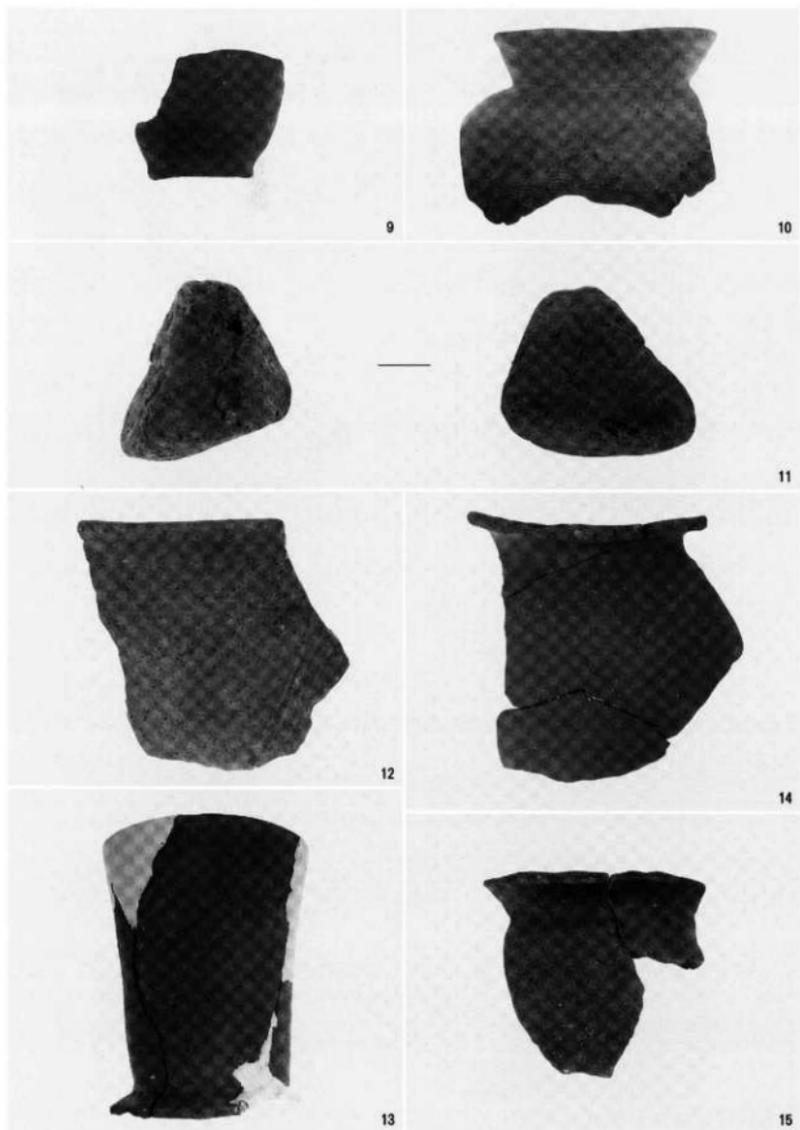
7区・調査風景（東から）



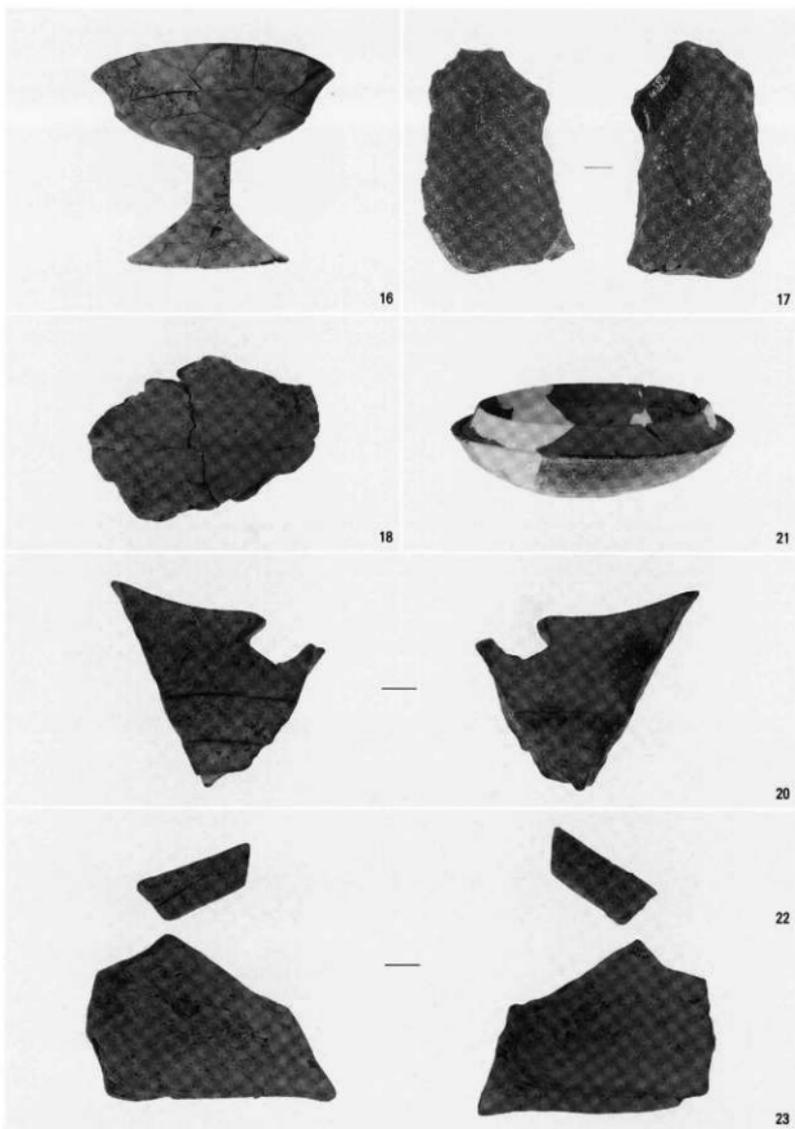
7区・土層断面（東から）



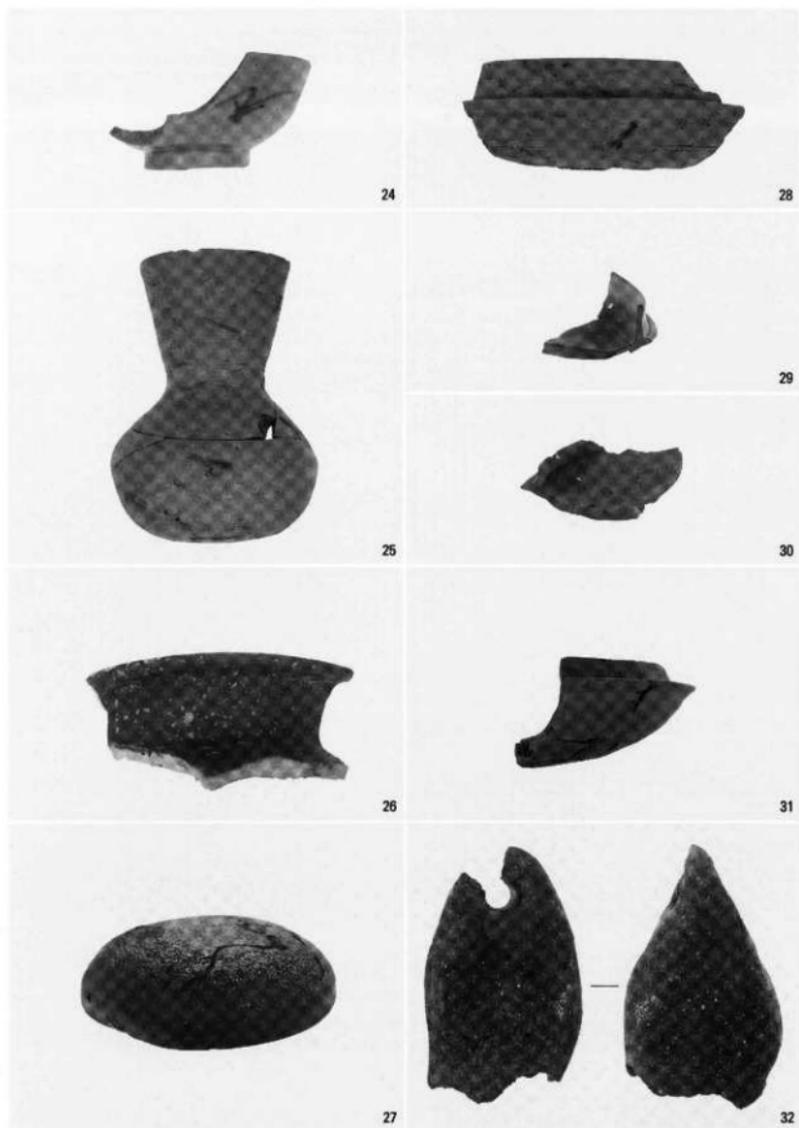
1区·SP105 (1)、SD202 (2·3)、SD203 (4~8) 出土遺物



1区・S D204 (9~11)、第3層 (12~15) 出土遺物



1区・第3層 (16~18・20・21)、5区 (22・23) 出土遺物



6区(24)、7区(25~31)出土遺物、表探資料(32)

X 中田遺跡第38次調査 (N T 97-38)

例 言

1. 本書は、大阪府八尾市刑部4丁目地内で実施した公共下水道工事（平成8年度第126工区）に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する中田遺跡第38次調査（NT97-38）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第246-2号 平成9年7月23日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成9年10月20日～10月23日（実働4日間）にかけて、樋口 薫を調査担当者として実施した。調査面積は約29㎡である。
1. 現地調査にあたっては、坂田典彦（現東大阪市教育委員会嘱託）、中西明美、西村和了の参加を得た。
1. 内業整理は、現地調査終了後、随時実施し、平成11年8月31日に完了した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測-市森千恵子、坂田、岸田靖子、西岡千恵子、松本貴臣が、図面トレース-市森、本書の執筆・写真撮影及び編集-樋口が担当した。

凡 例

1. 遺構実測図の縮尺は、平面図が1/50・1/1000・1/5000、断面図が1/50を基調とした。
1. なお本書で使用している土器の器種分類や編年および年代は下記の文献に拠っている。本文中では煩雑さを避けるため、これら引用・参考文献をそのつど提示することは割愛した。
弥生土器-寺沢 薫・森岡秀人編著 1989『弥生土器の様式と編年-近畿編I-』木耳社
土師器 -古代の土器研究会 1992『古代の土器1 都城の土器集成』
横田洋三 1981「付論 山上土師編年試案」『平安京跡研究調査報告第5輯』
須恵器 -田辺昭三 1966『陶邑古窯址群I』平安学園考古学クラブ
古代の土器研究会 1992『古代の土器1 都城の土器集成』
瓦 器 -百瀬正恒・近江俊秀・尾上 実・森島康夫 1995「各地の土器様相7. 近畿」
「土器・陶磁器6. 瓦器碗」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
羽 釜 -森島康雄 1990「中河内の羽釜」『中近世土器の基礎研究VI』日本中世土器研究会
1. 本文・挿図・写真図版の遺構・遺物番号はすべて一致する。

本文目次

第1章 はじめに	131
第2章 調査概要	133
第1節 調査方法と経過	133
第2節 層序	134
第3節 検出遺構と出土遺物	
(1) 検出遺構	136
(2) 出土遺物	140
第3章 まとめ	144

挿図目次

第1図 調査地周辺図 (S=1/5000)	131
第2図 調査区設定図 (S=1/1000)	133
第3図 第1区・第2区平面・断面図 (S=1/50)	136
第4図 第3区・第4区平面・断面図 (S=1/50)	137
第5図 第5区・第6区平面・断面図 (S=1/50)	138
第6図 第7区・第8区平面・断面図 (S=1/50)	139
第7図 第1区・第2区出土遺物 (S=1/4)	140
第8図 S E3101出土遺物 (S=1/4)	141
第9図 第3区～第8区出土遺物 (S=1/4)	143

表目次

表1 中田遺跡調査地一覧表	132
---------------------	-----

図版目次

図版一 第1区周辺状況(北東から) S D1101(東から)	
第2区周辺状況(南から) 第2区北壁地層(T.P.+8.8~9.8m付近)	
第3区周辺状況(北から) S E3101検出状況(北西から)	
図版二 S E3101埋土断面(北から)	

S E3101曲物側内完掘状況 (北から)

S E3101曲物側内 瓦器碗出土状況 (北から)

図版三 第4区周辺状況 (南東から) 第4区北壁地層 (T.P.+8.8~10.0m付近)

第5区~第7区周辺状況 (南から) 第5区北壁地層 (T.P.+9.5~10.5m付近)

第6区北壁地層 (T.P.+9.2~10.5m付近) S K6201・S K6202 (南から)

図版四 第7区北壁地層 (T.P.+9.2~10.7m付近) 第707層内 弥生土器出土状況 (北西から)

第8区周辺状況 (北から) 第8区東壁地層 (T.P.+9.0~10.7m付近)

調査参加者

図版五 S E3101出土遺物

図版六 第405層・第503層・第707層出土遺物

第1章 はじめに

中田遺跡は、八尾市のほぼ中央部に位置し、現在の行政区画では、中田1～5丁目、刑部1～4丁目、八尾木北1～6丁目の東西1.1m・南北0.8mがその範囲とされている。地理的には、旧大和川の本流であった古長瀬川と古玉串川に挟まれた沖積地上に立地し、同地形上において、北側に小阪合遺跡、西側に矢作遺跡、南側に東弓削遺跡等が隣接している。

当遺跡は、昭和45年に行われた区画整理事業でその存在が確認され、昭和46年に大阪府教育委員会により最初の発掘調査が実施された。その後、大阪府教育委員会・中田遺跡調査会・八尾市教育委員会・当調査研究会による多次にわたる調査が続けられており、その結果、当遺跡は、弥生時代前期～近世にかけての複合遺跡として認識されるようになってきた。特に、古墳時代初頭～前期にかけての遺構・遺物が当遺跡全般に存在していることが調査で確認されている。

今回の調査地である刑部4丁目付近は、中田遺跡の中央やや東側に位置し、これまでに近隣では当調査研究会による4件の調査が実施されている。調査地の西約15m地点の第17次調査地(N



第1図 調査地周辺図 (S = 1/5000)

表1 中田遺跡調査地一覧(地図番号は第1図に対応)

番号	調査名 (略号)	調査地番	調査面積 (㎡)	調査期間	調査機関	文献
1	NT91-7	八尾木北3丁目340・341	90	平成3年5月17日～5月27日	八文研	(財)八尾市文化財調査研究会報告34
2	NT92-15	刑部3丁目地内	35	平成5年3月8日～4月15日	八文研	(財)八尾市文化財調査研究会報告56
3	市96-487	刑部2丁目177		平成7年11月14日	市教委	八尾市文化財調査報告36
4	NT95-30	刑部2丁目地内	56	平成7年9月20日～10月13日	八文研	(財)八尾市文化財調査研究会報告81
5	市95-22	刑部2丁目地内		平成7年11月28日・平成8年1月25・26日	市教委	八尾市文化財調査報告37
6	NT92-10	八尾木北3丁目	450	平成4年10月26日～平成5年1月22日	八文研	平成4年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告
7		中田1丁目・八尾木北5丁目	181		府教委	『中田遺跡調査概要(1986)』
8	NT90-6	八尾木北3丁目～刑部2丁目		平成3年1月16日～2月28日	八文研	(財)八尾市文化財調査研究会報告49
9	NT94-28	刑部2丁目地内	20.96	平成6年11月16日～12月5日	八文研	(財)八尾市文化財調査研究会報告49
10	NT93-20	八尾木北6丁目地内	28	平成5年10月12日～10月16日	八文研	(財)八尾市文化財調査研究会報告43
11	NT95-32	八尾木北6丁目98	32.5	平成7年12月18日～12月20日	八文研	(財)八尾市文化財調査研究会報告53
12	NT93-17	刑部4丁目357	140	平成5年7月27日～6月11日	八文研	(財)八尾市文化財調査研究会報告43
13	NT94-24	刑部4丁目210-1	184	平成6年4月13日～4月28日	八文研	(財)八尾市文化財調査研究会報告49
14	NT94-27	八尾木北	160	平成6年11月7日～22日	八文研	平成6年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告
15	NT92-14	八尾木北6丁目地内	170	平成5年1月30日～3月4日	八文研	(財)八尾市文化財調査研究会報告56
16	市92-314	八尾木北6丁目		平成4年12月15・16日	市教委	八尾市文化財調査報告28
17	NT94-25	八尾木北6丁目	260	平成6年5月30日～6月22日	市教委	(財)八尾市文化財調査研究会報告56
18	NT93-22	刑部3丁目・八尾木北6丁目	22.5	平成6年1月18日～2月14日	八文研	(財)八尾市文化財調査研究会報告43
19	NT93-21	刑部3丁目	28	平成5年10月20日～10月22日	八文研	(財)八尾市文化財調査研究会報告43
20	NT93-18	刑部3丁目	10	平成5年10月4日～10月9日	八文研	(財)八尾市文化財調査研究会報告43
21	NT92-11	刑部3丁目地内	81	平成4年11月6日～5年3月23日	八文研	(財)八尾市文化財調査研究会報告39
22	市S51	刑部3丁目	112	昭和51年9月～10月	市教委	八尾市文化財調査報告4
23	NT97-37	刑部2・3丁目地内	80	平成9年8月5日～8月20日	八文研	平成9年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告
24	市S49	刑部3丁目	160	昭和49年7月28日～9月3日	市教委	『中田遺跡調査報告II(1975)』
25	市91-373	八尾木東1丁目		平成4年3月4・18日	市教委	八尾市文化財調査報告28
26	市86-532	八尾木北6丁目166		昭和62年8月19日・26～9月5日	市教委	八尾市文化財調査報告17
27		八尾木4丁目5		昭和60年9月24日～30日	市教委	八尾市文化財調査報告15
28	HY89-4	八尾木東1丁目	72	昭和65年1月6日～23日	八文研	(財)八尾市文化財調査研究会報告37
29	HY90-5	八尾木東1丁目	50	平成2年11月19日～12月6日	八文研	(財)八尾市文化財調査研究会報告32
30	市90-330	刑部3丁目53-1		平成2年10月23日	市教委	八尾市文化財調査報告22
31	NT97-40	刑部3丁目地内	16	平成10年1月9日～1月14日	八文研	平成9年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告
32	市90-260	刑部4丁目407-2・4・8		平成2年9月21日	市教委	八尾市文化財調査報告22
今回の調査地	NT97-38	刑部4丁目地内	29	平成9年10月20日～10月23日	八文研	平成9年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告

調査機関 府教委：大阪府教育委員会 市教委：八尾市教育委員会 八文研：八尾市文化財調査研究会

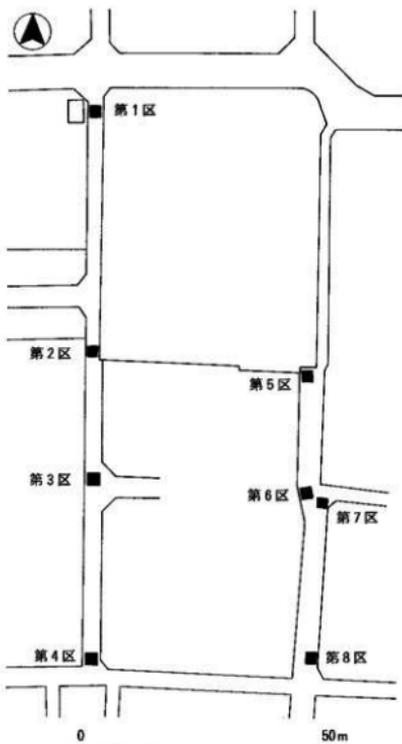
T93-17)では、弥生時代後期～中世に比定される遺構・遺物を検出した。特に弥生時代後期～古墳時代初頭の土器集積からは、古備地方の特殊器台の影響を受けたと思われる大型器台が出土しており、当道跡の性格を考察する上で貴重な資料といえる。また、今回の調査地に採まれた所に位置する第24次調査地 (NT94-24)では、弥生時代後期～平安時代末期の遺物包含層や、平安時代末期の居住域を検出している。さらに、当調査地に南接する第37次調査地 (NT97-37)では、弥生時代後期～古墳時代前期や、奈良時代～平安時代にかけての遺構・遺物を検出している。特筆すべき出土遺物には器台片や他地方の土器が挙げられ、調査地周辺に古墳が存在した可能性も考えられる。

第2章 調査概要

第1節 調査方法と経過

今回の調査は、八尾市刑部4丁目地内の公共下水道工事 (8-126T区)に伴うもので、当調査研究会が中田道跡内で実施した第38次調査 (NT97-38)にあたる。調査は、東西約50m、南北約120mの範囲内において、約2m四方の人孔部分8箇所を対象とする極めて点的なもので、調査総面積は約29㎡を測るに過ぎない。本調査では、この8箇所の調査区のうち、北西隅のものから南に向かって第1区～第4区、北東隅のものから南に向かって第5区～第8区と呼称した。また、堆積地層名については3桁のアラビア数字で表示した。そのうち上1桁は調査区を表し、以下の桁は地層名を示す。遺構名については、序で示した通り略号を用い、遺構番号の前に冠した。一方、遺構番号は、4桁のアラビア数字で表現した。つまり上1桁は調査区番号、上2桁は遺構検出面を表し、それ以下の桁で遺構の検出番号を示す。

掘削に際しては、八尾市教育委員会の指示書に基づき、現地表下1.0～1.3m前後までは機械掘削、それ以下0.3～1.0mについては人力掘削を主に、状況に応じて機械掘削を併用して行い、遺構・遺物の検出に努めた。調査期間は、平成9年10月20日～10月23日 (実働4日間)までである。



第2図 調査区設定図 (S = 1/1000)

第2節 層序

ここでは、各調査区で確認された地層について概説していく。

〔第1区〕

第100層 現代の盛土・攪乱層である。上面の標高はT.P+10.55mを測る。

第101層 5Y4/2灰オリブ色シルト混粘土（マンガンを含む）。

第102層 5Y4/1灰色細粒砂混粘土質シルト（マンガンを含む）。

第103層 5Y5/2灰オリブ色シルト。〔上面は遺構面〕

第104層 10G4/1暗緑灰色シルト。

第105層 10YR5/3黄褐色シルト。

〔第2区〕

第200層 現代の盛土・攪乱層である。上面の標高はT.P+10.49mを測る。

第201層 2.5Y4/2暗灰黄色中礫混粘土（酸化鉄分・マンガンを含む）。

第202層 5Y4/1灰色細礫混粘土（マンガンを含む）。

第203層 5Y4/1灰色粘土（マンガンを含む）。

第204層 5Y4/2灰オリブ色中礫混シルト。

第205層 5Y4/1灰色中礫。流水堆積層である。

第206層 5Y5/1灰色極粗粒砂混シルト。斜行ラミナ構造をもつ流水堆積層である。流向は南東-北西方向か。

第207層 5Y5/2灰オリブ色中礫。流水堆積層である。なお、第205層～第207層までは、各地層との間に不整合は認められないことから、一連の堆積構造のもとで形成された地層といえる。

〔第3区〕

第300層 現代の盛土・攪乱層である。上面の標高はT.P+10.5m前後を測る。

第301層 2.5Y4/2暗灰黄色細礫混粘土。

第302層 2.5Y4/2暗灰黄色中礫混粘土。

第303層 2.5Y5/1黄灰色細礫混粘土（マンガンを極少量含む）。

第304層 2.5Y4/1黄灰色細礫～中礫混粘土質土。

第305層 5Y5/2灰オリブ色極粗粒砂混粘土質シルト。〔上面は遺構面〕

第306層 5Y5/1灰色中礫。流水堆積層である。

第307層 5Y5/2灰オリブ色中礫。流水堆積層である。上層との間に不整合性は認められない。

〔第4区〕

第400層 現代の盛土・攪乱層である。上面の標高はT.P+10.5m前後を測る。

第401層 2.5GY4/1暗オリブ灰色極粗粒砂混粘土。

第402層 7.5Y4/1灰色細礫混粘土質土（マンガンを含む）。

第403層 7.5Y5/1灰色極粗粒砂～中礫。流水堆積層である。

第404層 10Y5/1灰色中礫混細礫。流水堆積層である。

第405層 7.5Y5/1灰色細礫。流水堆積層である。

第406層 7.5Y5/2灰オリブ色細礫。流水堆積層である。なお、第403層～第406層までは、各

地層との間に不整合は認められないことから、一連の堆積構造のもとで形成された地層といえる。

[第5区]

- 第500層 現代の盛土・攪乱層である。上面の標高は T.P.+10.96m 前後を測る。
 第501層 7.5Y4/1 灰色中礫混粘土。
 第502層 7.5Y4/2 灰オリブ色細礫混粘土。
 第503層 10Y4/2 オリーブ灰色中礫混粘土 (マンガンを含む)。
 第504層 5Y4/2 灰オリブ色中礫。流水堆積層である。

[第6区]

- 第600層 現代の盛土・攪乱層である。上面の標高は T.P.+10.8m 前後を測る。
 第601層 7.5Y3/1 オリーブ黒色中礫混粘土。
 第602層 7.5Y4/1 灰色細礫混粘土。[上面は遺構面]
 第603層 10Y4/1 灰色中礫混粘土 (マンガンを含む)。
 第604層 7.5Y4/1 灰色中礫混粘土。[上面は遺構面]
 第605層 7.5Y3/1 オリーブ黒色中礫混細礫。流水堆積層である。
 第606層 10Y6/1 灰色粗粒砂～中礫。流水堆積層である。

[第7区]

- 第700層 現代の盛土・攪乱層である。上面の標高は T.P.+10.78m 前後を測る。
 第701層 2.5GY4/1 暗オリブ灰色中礫混粘土。
 第702層 2.5GY5/1 オリーブ灰色中礫混粘土 (マンガンを含む)。
 第703層 2.5GY4/1 暗オリブ灰色中礫混粘土。
 第704層 7.5GY 暗緑灰色極粗粒砂混粘土。
 第705層 2.5GY5/1 オリーブ灰色細礫混極粗粒砂。流水堆積層である。
 第706層 2.5GY5/1 オリーブ灰色極粗粒砂。流水堆積層である。
 第707層 5GY5/1 オリーブ灰色極粗粒砂。流水堆積層である。
 第708層 2.5GY4/1 暗オリブ灰色細礫。流水堆積層である。
 第709層 7.5Y5/2 灰オリブ色細礫混極粗粒砂。流水堆積層である。なお、第705層～第709層までは、各地層との間に不整合は認められないことから、一連の堆積構造のもとで形成された地層といえる。

[第8区]

- 第800層 現代の盛土・攪乱層である。上面の標高は T.P.+10.7m 前後を測る。
 第801層 5Y3/1 オリーブ黒色粘土。
 第802層 5Y4/1 灰色中礫混粘土 (マンガンを含む)。
 第803層 5Y5/2 灰オリブ色中礫混粘土 (酸化鉄分・マンガンを含む)。
 第804層 5Y4/2 灰オリブ色中礫混粘土 (マンガン・炭化物を含む)。
 第805層 7.5Y4/1 灰色粘質土混粗粒砂～中礫。流水堆積層である。
 第806層 5Y5/3 灰オリブ色シルト～極粗粒砂。ラミナ構造が顕著に認められる。
 第807層 10YR6/6 明黄褐色粗粒砂～細礫。ラミナ構造が顕著な流水堆積層である。

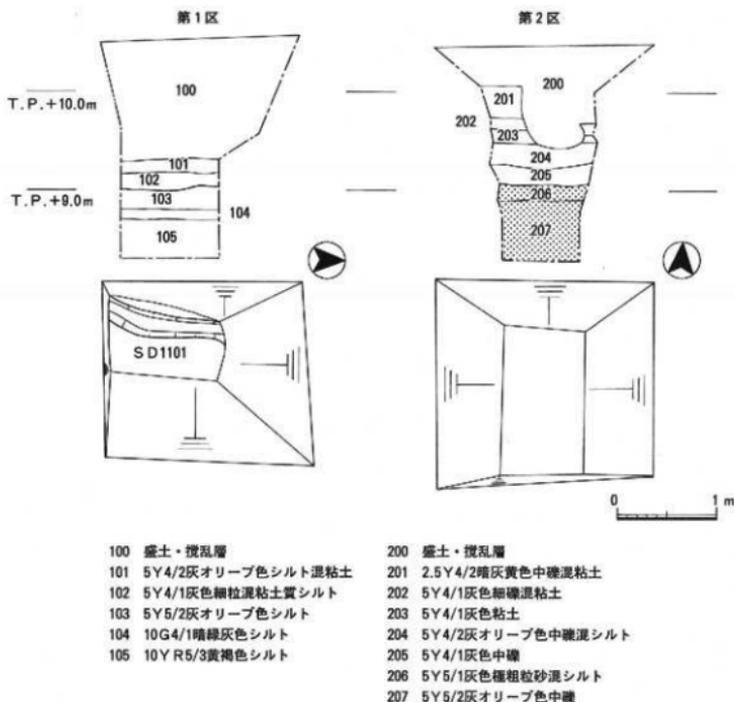
第3節 検出遺構と出土遺物

(1) 検出遺構

調査の結果、第1区で溝を1条（SD1101）、第3区で井戸を1基（SE3101）、第6区で溝1条（SD6101）、土坑2基（SK6201・SK6202）を検出した。以下、各遺構について説明していく。

[第1区]

現地表下1.5m（T.P.+9.0m）前後の第103層上面で捉えた遺構面で、溝を1条（SD1101）検出した。SD1101は、調査区の西よりの所で検出した南-北方向に伸びる溝である。検出長は約1.2mであるが、北壁・南壁で両肩を確認できたので、さらに伸びるものと思われる。遺構の規模は、幅約0.3m、深さ約0.17mである。埋土は10G3/1暗緑灰色粘土の単一層で、断面はU字状を呈する。埋土内からは古墳時代終末期～奈良時代に帰属する土師器の底部が出土した。その他、第101層・第102層内から土器片が少量出土した。



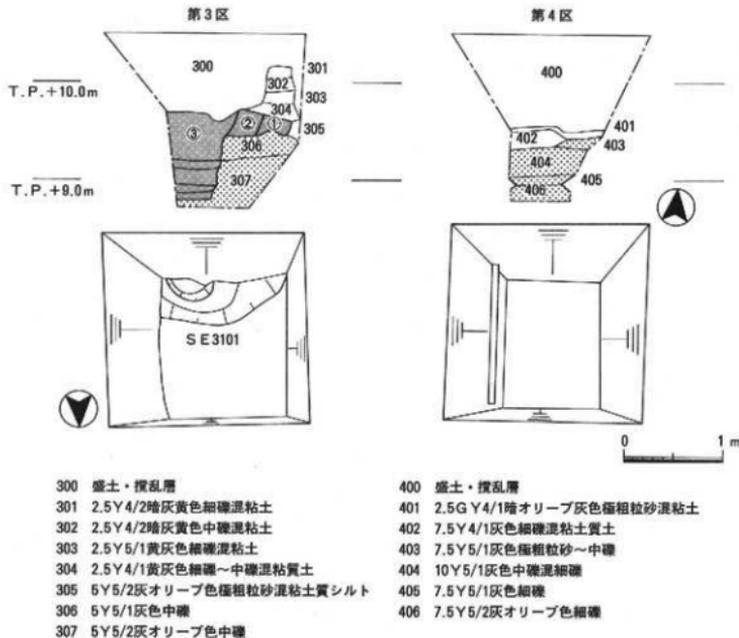
第3図 第1区・第2区平面・断面図（S=1/50）

〔2区〕

遺構の検出はなかった。第201層・第202層・第203層内から土器片が少量出土している。

〔3区〕

現地地表下0.8m (T.P.+9.7m) 前後の第305層上面で捉えた面で、井戸を1基 (SE3101) 検出した。SE3101は調査区の南端で検出した。掘形平面形は、南部分と東部分が調査区外に至るため不明であるが、検出部分で、東西幅約1.3m、南北幅約0.4mを測る。掘形断面は、上面から約0.2m掘り下げた所で、幅約0.5mのテラスを造り、さらに、中央部をほぼ垂直に0.7m掘り下げている。井戸側には曲物を利用しているが、その直径は約0.4mで、下から4段分が遺存していた。掘形埋土は、①5Y5/1灰色細礫混粘土、②5Y4/2灰オリーブ色中礫混粘土 (炭化物を含む) の2層からなる。井戸側内埋土は、5Y4/1灰色細礫混粘土の単一層である。井戸側内からは、土師器や瓦器の細片、人頭大の石や瓦等が出土したほか、最下層からは平安時代末期 (12世紀中頃) に比定される完形の瓦器碗が2個出土した。また、本遺構に伴うことは確実であるが、掘形内か井戸側内かが不明の土器も認められる。井戸側の最下層から出土した瓦器碗は、重なりあうような状態で出土しており、井戸が廃絶する直前に意識的にそこに置いたことは明らかである。したがって、本遺構の廃絶時期もその頃に求めることができる。その他、3区からは、第303層～第307層からもそれぞれ土器片が少量出土している。



第4図 第3区・第4区平面・断面図 (S = 1/50)

[4区]

遺構の検出はなかった。遺物は、河川内埋土と思われる、第405層内から弥生時代後期（畿内第V様式期）の壺の口縁部が出土した。

[5区]

遺構の検出はなかった。遺物は、第503層から土器片が少量出土した他、河川内埋土と思われる第504層内から、弥生土器の細片を検出した。

[6区]

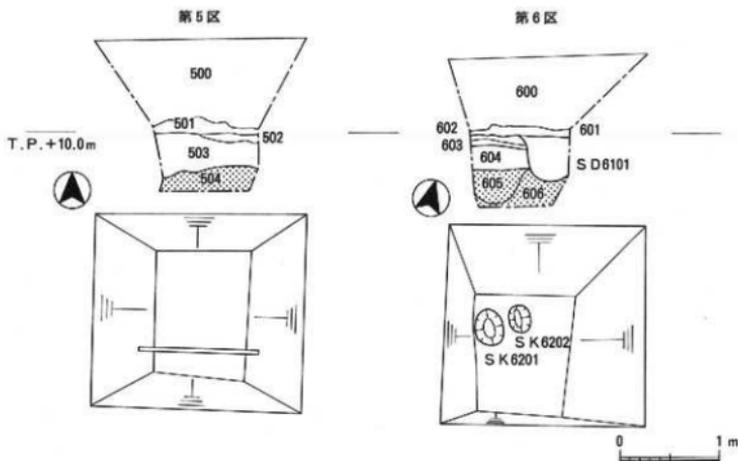
現地表下1.0m (T.P.+10.0m) 前後の602層上面で溝を1条 (SD6101)、現地表下1.1m (T.P.+9.9m) 前後の604層上面で小穴2個 (SK6201・SK6202) を検出した。

溝 (SD)

SD6101は、調査区の北壁面で確認した溝である。平面的に検出することができなかったため検出長などは不明である。幅約0.5m、深さ約0.5mを測る。埋土は、7.5Y3/2オリーブ黒色粗粒砂～中礫で、断面はU字状を呈する。出土遺物はなかったため、遺構の時期は不明である。

土坑 (SK)

SK6201は調査区の西部で検出した。南北に長軸をもつ楕円形を呈し、長径約0.4m、短径約0.3mを測る。深さは約0.1mで、埋土は7.5Y4/1灰色粘土の単一層である。遺物の出土はなかつ



- 500 盛土・攪乱層
- 501 7.5Y4/1灰色中礫混粘土
- 502 7.5Y4/2灰オリーブ色細礫混粘土
- 503 10Y4/2オリーブ灰色中礫混粘土
- 504 5Y4/2灰オリーブ色中礫

- 600 盛土・攪乱層
- 601 7.5Y3/1オリーブ黒色中礫混粘土
- 602 7.5Y4/1灰色細礫混粘土
- 603 10Y4/1灰色中礫混粘土
- 604 7.5Y4/1灰色中礫混粘土
- 605 7.5Y3/1オリーブ黒色中礫混細礫
- 606 10Y6/1灰色粗粒砂～中礫

第5図 第5区・第6区平面・断面図 (S=1/50)

ため、遺構の時期は不明である。

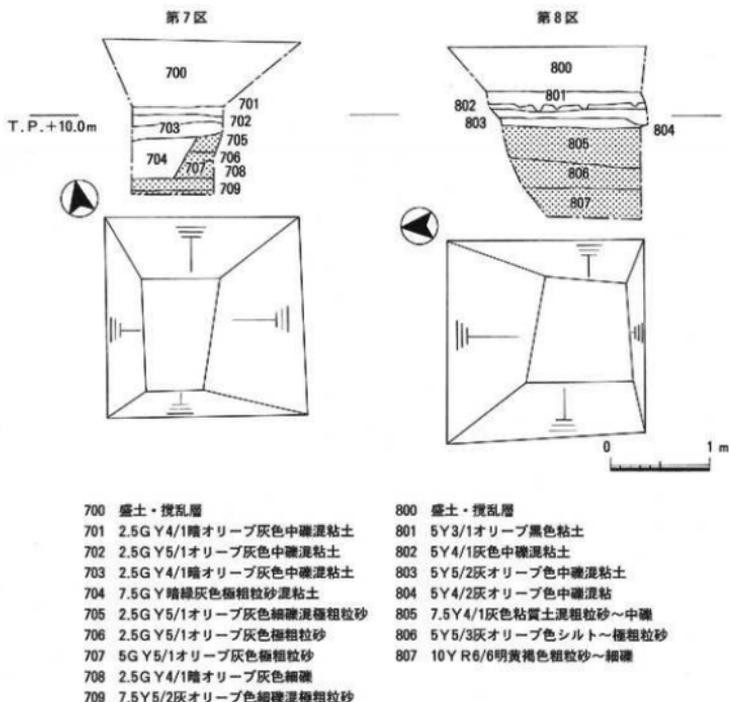
SK6202はSK6201の北東側約0.05mの地点で検出した。平面形状は、南北に長軸をもつ楕円形で、その規模は長径約0.35m、短径約0.3mを測る。深さは約0.1mで、埋土は7.5Y4/1灰色粘土の単一層である。遺物の出土はなかったため、遺構の時期は不明である。

[7区]

遺構の検出はなかった。遺物は、第702層から土器片が少量出土し、また、河川内埋土と思われる第707層内からは、弥生時代後期(畿内第V様式期)の長頸壺が出土した。

[8区]

遺構の検出はなかった。第803層・第804層から土器片が少量出土した。



第6図 第7区・第8区平面・断面図 (S = 1/50)

(2) 出土遺物

【第1区】

SD1101内出土遺物(1)

土師器が1点出土した。(1)は、底部に平らな面を持ち、内外面ともに粗いハケ目(7本/cm)を伴う工具でナデを施している。細片であるため器種は不明であるが、煮炊具用の土器と思われる。古墳時代終末期～奈良時代に帰属するものであろう。

第101層内出土遺物(2～4)

土師器や須恵器の細片が16点出土した。この内、図化が可能なものは4点であった。(2)は土師器の口縁部である。小片のため復元は困難であるが、口径は15.4cmを測るものである。(3)は土師器碗の口縁部～体部の一部である。体部内面には、放射状にヘラミガキが施されているようだ。体部外面には二次焼成を受けた痕跡も認められる。4は須恵器甕の口頸部～肩部である。肩部外面には自然軸がみられる。また内面は同心円タタキが施された後、横方向のナデにより擦り消されている。

第102層内出土遺物(5)

土師器や須恵器の細片が7点出土した。この内、図化できたのは1点のみである。(5)は須恵器甕の口縁部である。小片のため復元は困難である。内・外面ともに横ナデ調整を行う。

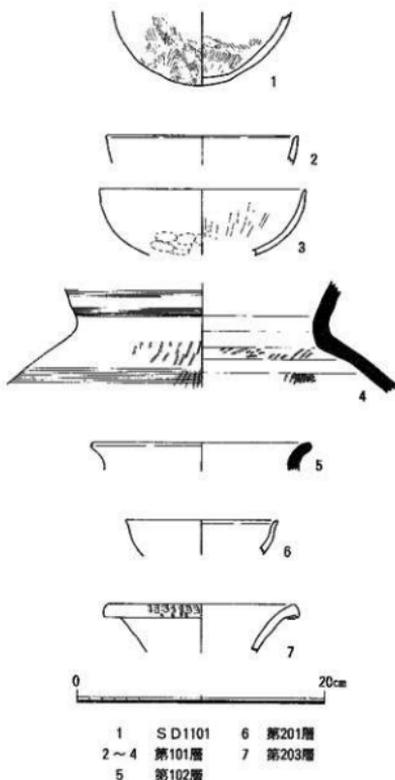
【2区】

第201層内出土遺物(6)

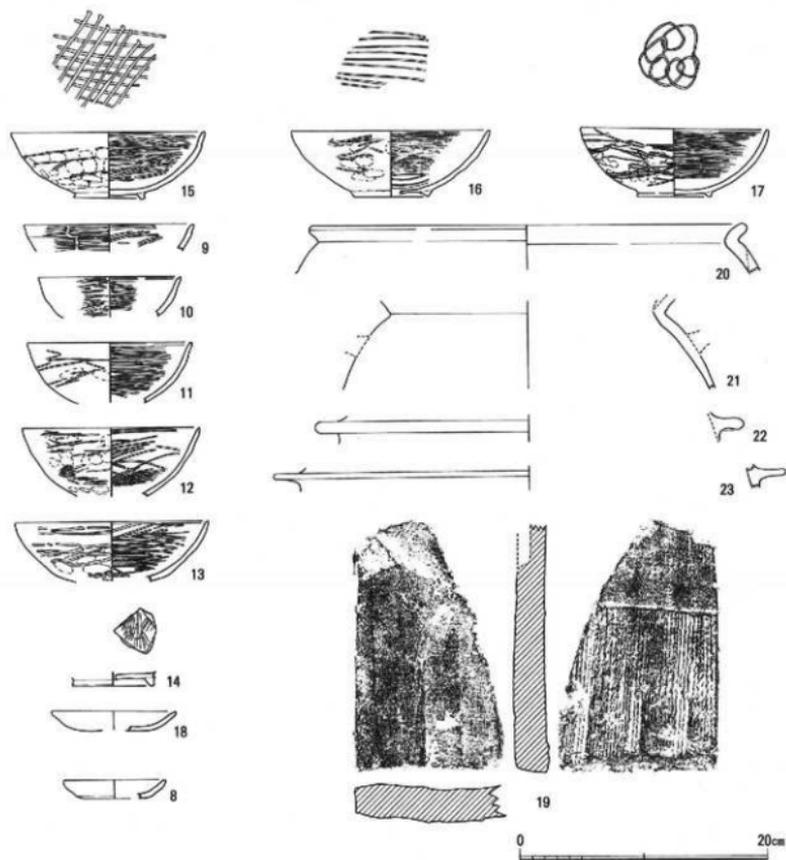
土師器と須恵器の細片が各1点ずつ出土した。その内、図化できたのは土師器(6)のみである。

第203層内出土遺物(7)

弥生土器と須恵器が各1点ずつ出土した。その内、図化できた(7)は、畿内第IV様式期に属する広口壺の口縁部である。口縁端部は肥厚し、わずかに外下方に垂下する。垂下させたことによってできた端面には簾状文(5本/一帯)、と刻み目文などの装飾が施される。色調は灰黄褐色(10YR5/2)を呈し、角閃石や長石などの胎土を含む。生駒西麓産の土器である。



第7図 第1区・第2区出土遺物(S=1/4)



第8図 SE3101出土遺物 (S = 1/4)

[3区]

SE3101内出土遺物 (8~23)

井戸側内から土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦・拳大~人頭大の石が49点(その内15点が石)出土した。その内、図化が可能なものは12点(8~19)である。また、掘形内出土か井戸側内出土か不明の土器も51点認められる。内訳は、土師器・須恵器・黒色土器・瓦器の細片が48点、拳大~人頭大の石が3点で、図化できたのは4点(20~23)だけである。

(8)は土師器小皿の細片である。色調は褐色(10YR6/2灰黄褐色)系を呈し、胎土は精良である。外面には、横ナデが一段施される。12世紀代に属するものであろう。(9~18)は瓦器

である。この内、(12・14・15)は和泉型に分類されるが、それ以外は大和型に属する。(9)は他の瓦器と比較すると器壁が厚く、体部外面のヘラミガキには分割性が認められる。(10)と(11)は口縁端部内面に1条の沈線をめぐらす。外面のヘラミガキ調整は粗略化しているが、内面は非常に密である。特に(10)のヘラミガキは、一単位が非常に細かく、しかも深い。(12)は、内・外面ともに粗いヘラケズリを施す。ヘラミガキには、大和型にみられるようなシャープさは認められない。(14)は底部～高台部である。見込みには乱方向にヘラミガキを施すが、暗文を意識したものではない。貼り付け高台は断面逆三角形を呈し、しっかりとしたものである。11世紀後半～末に比定される。(16)の外面調整は、口縁部～体部上方にのみ粗いヘラミガキが施される。成形時の指頭圧痕も顕著に残る。一方、内面については、口縁部～体部にかけて細かいヘラミガキを密に施す。見込みには平行線状にヘラミガキが施される。断面形状が逆三角形の貼り付け高台はやや退化傾向にある。12世紀の後半に属するものであろう。(15・17)はほぼ完形品である。(17)の外面調整は、口縁部～体部にかけて粗いヘラミガキが五分割で施される。内面については、口縁端部内面に沈線が一条めぐり、体部には隙間なく圈線状にヘラミガキが施される。見込みの暗文は連結輪状である。12世紀中頃に帰属するものである。(15)の外面調整はヘラミガキが施されるが、粗雑で、形成時の指頭圧痕が顕著に残るほどである。体部内面は、密にヘラミガキが行われるようだが、(17)のようにヘラの単位が明瞭に残らない。見込みには格子状の暗文が施される。(18)は、やや粗い胎土の瓦器小皿である。炭素の吸着が不良のためか、色調は白灰色(N7/)を呈する。特に外面については炭素の付着が全く認められない。調整は横ナデを施すが、それは内面と口縁部外面のみで、底部外面については指頭圧痕のみ残る。(19)は平瓦である。凹面には布目痕や模竹痕のような凹凸が認められる。凸面には、側縁に平行した細かい縄目タタキが明瞭に残る。

(20～23)は土師器の羽釜片である。(20)と(21)はともに、「く」の字に外反する口縁部をもつ羽釜である。20の口縁端部は丸く終わる。調整については前・後者ともに口縁部が横ナデ、体部が板状工具による横方向のナデを施す。(22)と(23)は鈎の一部分である。両者とも下面には使用時に付着した煤が認められる。

第303層内出土遺物(24)

弥生土器が1点出土した。24は弥生時代後期(畿内第V様式期)～古墳時代前期(布留式期)に比定される甕の口頸部～肩部である。外面調整は摩滅が激しく不明、内面は指ナデなどの調整が認められる。胎土はやや粗く、2mm以下の砂粒を多く含む。

[4区]

第405層内出土遺物(25・26)

弥生土器が2点出土した。いずれも弥生時代後期(畿内第V様式期)に帰属するものである。(25)は、広口壺である。口縁端部は肥厚し端面を形成するが、加飾は行われない。摩滅が激しく調整は不明瞭であるが、頸部外面は縦方向のハケナデを施すものと思われる。(26)は体部最下方～底部である。外面はヘラミガキを、内面はハケ状の工具によるナデを施す。胎土には角閃石などが多く含まれており、生駒西麓産のものであろう。

〔5区〕

第503層内出土遺物 (27~29)

土師器・須恵器・瓦器の細片が17点出土した。この内、図化が可能なものは3点(27~29)である。(27)は須恵器杯蓋の口縁部である。細片のため、復元は困難である。(28)は須恵器杯身である。口縁端部は段を有し内傾、受部は上・外方にのびる。杯部外面には記号文が施される。5世紀後半~末に属するものである。(29)は瓦器の口縁部である。調整については、外面は粗いヘラミガキが、内面は密にヘラミガキが施される。胎土は精良である。内・外面ともに炭素の吸着があまく、全体的に色調は灰色みが強い。

第504層内出土遺物 (30・31)

弥生土器と土師器がそれぞれ1点ずつ(30・31)出土した。(30)は壺の底部である。摩滅が激しく調整は不明である。(31)は高杯の柱状部である。外面は幅の広い板状丁具によるナデを施す。内面にはしほり目が顕著に残る。古墳時代前期に属するものである。

〔7区〕

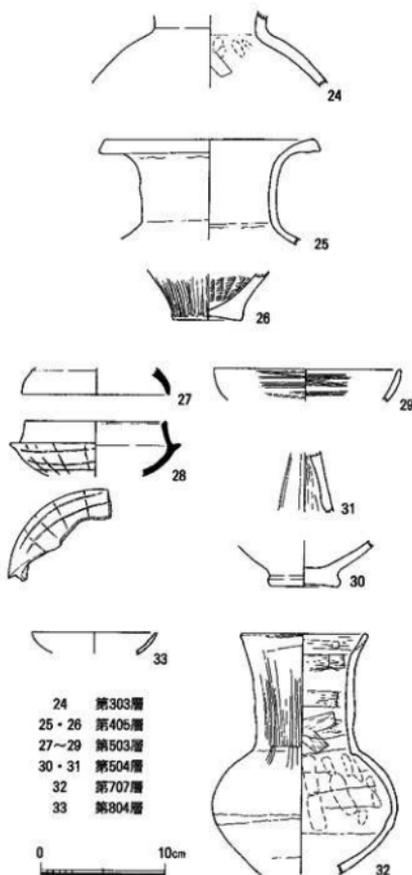
第707層内出土遺物 (32)

弥生土器が3点出土し、その内、図化できたのは1点(32)だけである。(32)は弥生時代後期(畿内第V様式期)に比定される長頸壺である。摩滅が激しいため調整は不明瞭であるが、外面は全体を縦方向のヘラミガキを施す。頸部内面は横方向のハケナデを行う。粘土接合痕も数箇所観察できる。

〔8区〕

第804層内出土遺物 (33)

白色系土師器の口縁部破片が1点(33)出土した。口縁部内・外面の調整はナデである。



第9図 第3区~第8区出土遺物 (S = 1/4)

第3章 まとめ

今回の調査では、弥生時代後期～中世に比定される遺構・遺物を確認した。出土遺物量はコンテナ4箱である。以下、時代ごとに述べていく。

〔弥生時代後期〕

この時期の明確な遺構は検出していないが、第405層と第707層内から弥生時代後期（畿内第V様式期）に比定される土器が出土した。両地層は、極粗粒砂～細礫で構成されていることから、埋没自然河川であったと推定される。なお、当調査地に近接する第24次調査地（刑部4丁目210-1）においても、弥生時代後期以前の埋没自然河川に伴う流水堆積層が確認され、占玉串川に関連した自然河川の存在を指摘していることから、今回の調査でそれを裏付けることができた。

〔古墳時代終末期～奈良時代〕

この時期の遺構は、第103層上面で検出した溝（SD1101）がある。当調査区の南東約50mの地点に位置する第6次調査地（刑部2丁目地内）において、奈良時代前期（8世紀前半）に比定される溝や土器埋納遺構が検出されており、当調査区との関連が注目される。

〔平安時代末期〕

この時期の遺構は、第305層上面で検出した井戸（SE3101）がそれに相当する。当調査区の南南東約25m地点にある第24次調査地においても、平安時代末期の居住域が確認されており、今回の調査により居住域がさらに北へ拡がることが判明した。

参考文献

- ・高萩千秋 1994「中田遺跡第17次調査（NT93-17）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告43』（財）八尾市文化財調査研究会
- ・成海佳子 1995「中田遺跡第6次調査（NT90-6）」『中田遺跡 財団法人八尾市文化財調査研究会報告49』（財）八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則 1995「中田遺跡第24次調査（NT94-24）」『中田遺跡 財団法人八尾市文化財調査研究会報告49』（財）八尾市文化財調査研究会

圖 版



第1区周辺状況（東北から）



SD1101（東から）



第2区周辺状況（南から）



第2区北壁地層（T. P. +8.8~9.8m付近）



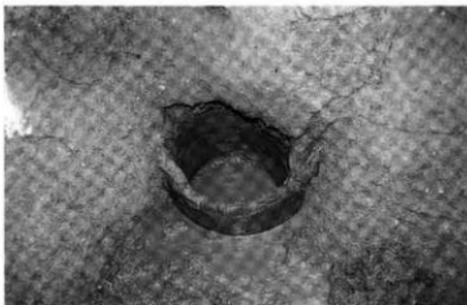
第3区周辺状況（北から）



SE 3101検出状況（北西から）



SE 3101埋土断面 (北から)



SE 3101曲物側内完掘状況 (北から)



SE 3101曲物側内 瓦器出土状況 (北から)



第4区周辺状況（南東から）



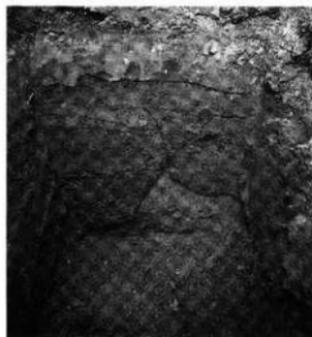
第4区北壁地層（T.P.+8.8~10.0m付近）



第5区~第7区周辺状況（南から）



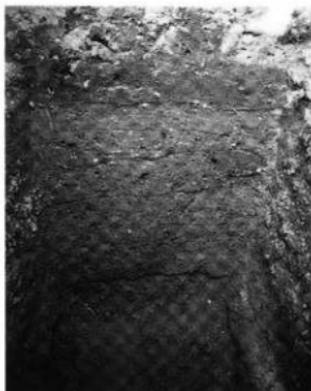
第5区北壁地層（T.P.+9.5~10.5m付近）



第6区北壁地層（T.P.+9.2~10.5m付近）



SK6201・SK6202（南から）



第7区北壁地層 (T.P.+9.2~10.7m付近)



第707層内出土弥生土器 (北西から)



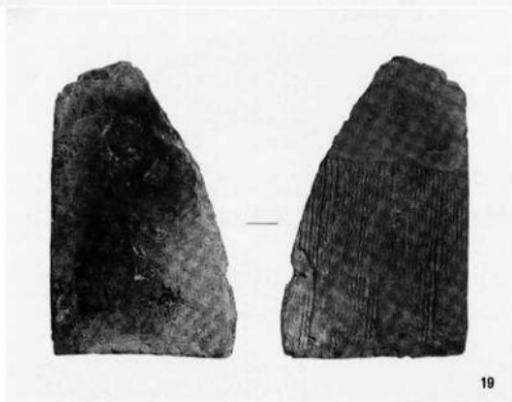
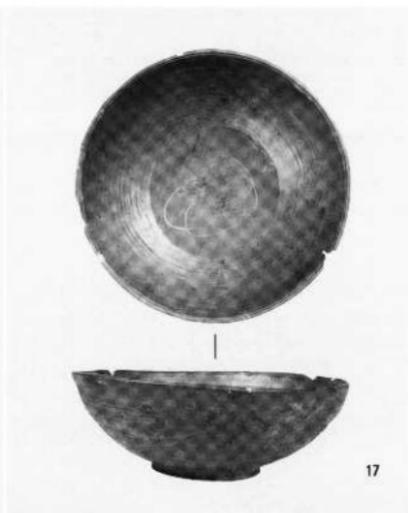
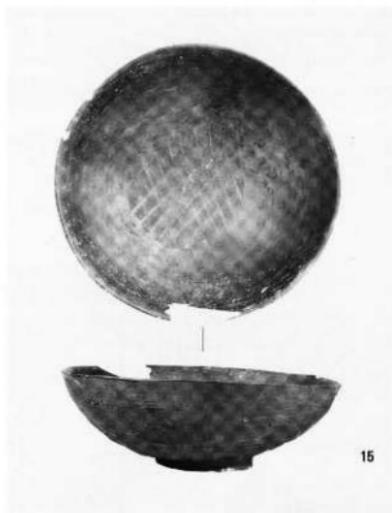
第8区周辺状況 (北から)



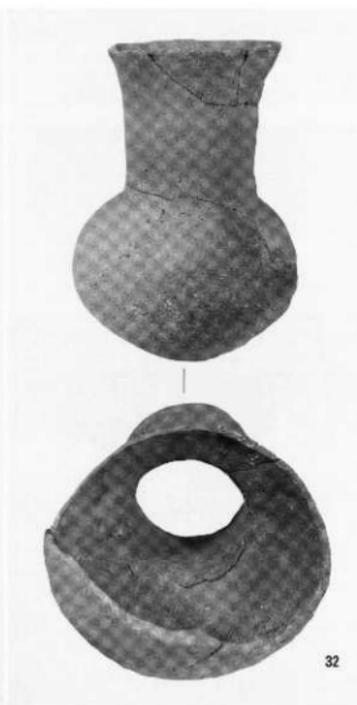
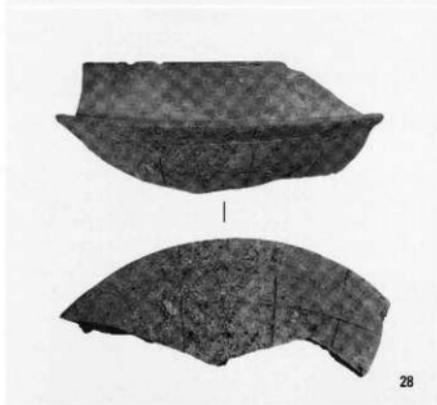
第8区東壁地層 (T.P.+9.0~10.7m付近)



調査参加者



S E 3101出土遺物



第406層・第503層・第707層出土遺物

XI 八尾寺内町遺跡第3次調査 (Y C97-3)

例 言

1. 本書は大阪府八尾市本町3丁目106、107番地で実施した共同住宅工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する八尾寺内町遺跡第3次調査（YC97-3）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第185号 平成9年11月12日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が個人から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成9年12月9日から12月15日（実働8日）にかけて、高萩千秋が担当者として実施した。調査面積は104㎡を測る。なお、調査においては八田雅美・中村百合・中西明美・西岡千恵子・市森千恵子が参加した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測・図面レイアウト・トレース-西岡・中谷嘉多・松尾 実が行った。
1. 本書の執筆・編集は高萩が行った。

本文目次

第1章 はじめに	147
第2章 調査概要	148
第1節 調査の方法と経過	148
第2節 基本層序	149
第3節 検出遺構と出土遺物	152
第4節 出土遺物観察表	169
第3章 まとめ	175

挿 図 目 次

第1図 調査地周辺図及び位置図	147
第2図 八尾寺内町の道路・環濠・土居・排水路網の復原図	148
第3図 調査区設定図及び区割図	148
第4図 断面図	150
第5図 遺構平面図	151
第6図 SE-1半断面図	152
第7図 SE-1出土遺物実測図	153
第8図 SK-2・SK-6出土遺物実測図	154
第9図 SP-5・SP-25出土遺物実測図	155

第10図	SP-25出土遺物実測図	157
第11図	SD-1出土遺物実測図1	160
第12図	SD-1出土遺物実測図2	161
第13図	SD-1山上遺物実測図3	162
第14図	SD-1出土遺物実測図4	163
第15図	SD-1出土遺物実測図5	164
第16図	SD-1出土遺物実測図6	165
第17図	SD-1山上遺物実測図7	166
第18図	東トレンチ遺構に伴わない出土遺物実測図	167
第19図	西トレンチ遺構に伴わない出土遺物実測図	168

表 目 次

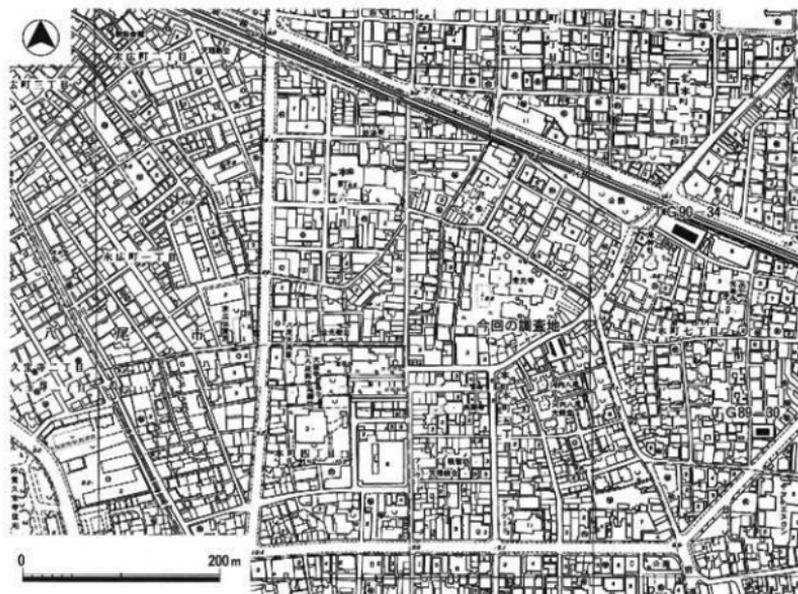
第1表	小穴一覽表	156
-----	-------	-----

図 版 目 次

図版 一	東トレンチ全景 (南から)	東トレンチ全景 (北から)
	東トレンチ北部 (西から)	西トレンチ全景 (南から)
	西トレンチSE-1 (南から)	西トレンチSK-5 (西から)
図版 二	西トレンチSK-5 (東から)	西トレンチ全景 (北から)
	西トレンチSK-6 (東から)	西トレンチ調査風景 (西から)
	西トレンチ調査風景 (北から)	
図版 三	SE-1	
図版 四	14・15 SK-2	17 SK-3
	18~21 SK-5	22~24 SK-6
図版 五	25~27 SK-6	28 SP-4
	29~32 SP-25	
図版 六	33 SP-25	34~37・48~50 SD-1
図版 七	SD-1	
図版 八	SD-1	
図版 九	SD-1	
図版一〇	SD-1	
図版一一	SD-1	
図版一二	東トレンチ	包含層
図版一三	西トレンチ	包含層

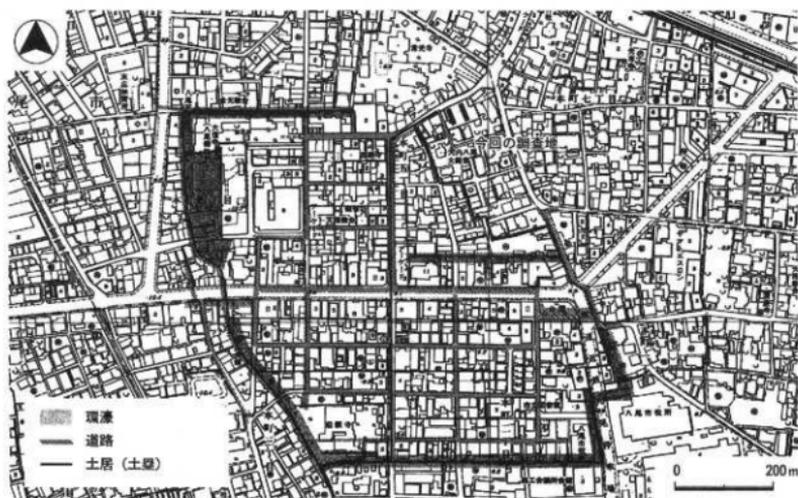
第1章 はじめに

八尾寺内町遺跡は八尾市のほぼ中央に位置し、現在の行政区画では、本町2～5丁目にあたる。地理的には長瀬川の右岸に位置し、近世初頭に成立した寺内町である。周辺の遺跡では弥生時代から始まる遺跡が点在する。近接では東に東郷遺跡、南東に小阪合遺跡、南に成法寺遺跡、西に久宝寺遺跡・久宝寺寺内町遺跡、北に菅振遺跡がある。八尾寺内町は、久宝寺寺内町の住人であった森本七郎兵衛貞治ら17人と「顕証寺」が久宝寺を出て、慶長十一年（1606）に長瀬川沿いの荒野の地を開拓し、「八尾御坊大信寺」を中心に寺内町が形成されたものである。当寺内町および久宝寺寺内町は大阪府下においてもその町並みが残っている貴重な地域である。近年、寺内町の町並み保全構想の一環として文献や旧家の古文書の調査研究が行われ、『寺内町の基礎計画に関する研究』と題して報告されている。また、市立歴史民俗資料館では慈願寺や旧家の古文書の調査が現在も行われている。しかし、寺内町内では家屋の改築や建替えに伴う遺構確認調査を市教委が実施している程度で、本格的な発掘調査はあまり行われていない。近年、当調査研究会が寺内町範囲の周辺部で一部の調査を行っているが、寺内町に関連するものは東郷遺跡第37次調査（TG92-37）で堀の一部と屋敷跡が確認されている程度である。その下層においては弥生時代後期～中世に至る集落および生産域の存在が多く確認されている。



第1図 調査地周辺図及び位置図

今回の調査地は、「八尾寺内町」の北東部（今口門）の外側に位置し、西郷領にあたる。当地の周辺には北東側約100mに八尾神社（もと栗栖神社と称し、西郷・木戸両村の氏神）、西側200mに八尾天満宮（八尾の天神さんと言われ、八尾寺内の鎮守）、八尾御坊大信寺（前記記載）、北側50mに常光寺（八尾地蔵で名高い河内の寺）が位置する。したがって、今回の発掘調査は市教委の遺構確認調査を除くと、寺内町形成及びそれ以前の歴史的環境を究明することができるものである。



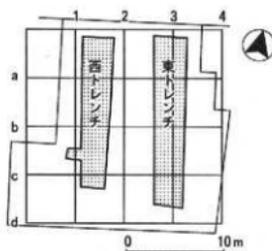
第2図 八尾寺内町の道路・環境・土居・排水路網の復原図

第2章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

今回の調査は共同住宅建設工事に伴うもので、その基礎工事によって破壊される部分を対象に幅3.0m、長さ約17.5mを測る南北方向のトレンチ2本（東トレンチ・西トレンチ）を設定した。さらに西トレンチの西側では一部地下埋設物があり、幅2m、長さ3mを拡張した。しかし、西トレンチの南部長さ約2m分（6㎡）と拡張部1m（2㎡）は現在の既設物があり、その部分については調査できなかった。

掘削の方法については市教委の遺構確認調査の結果をもとに、現地表（T.P.+9.0m）下1m前後の土層を機



第3図 調査区設定図及び区割図

械により排除した後、以下0.2m前後の土層について人力掘削および精査を実施し、遺構・遺物の検出に努めた。

地区割りについては、調査地北東角の上地境界杭から西へ4m、南へ1mの地点に任意の基準点を設定し、東西軸を北部土地境界線の方向に合わせた。区画は調査区範囲を包括できる南北20m、東西20mに5m角の方眼を作成した。区名は基準点より西へ20m交点を起点として南北軸は西から算用数字1～4、東西軸は北からa～dを付し、南東角を優先したかたちで1a区～4b区を付称した。この区名で各トレンチの遺構および遺物の取り上げなどの調査を実施した。

第2節 基本層序

調査区内で普遍的に堆積する11層を抽出して基本層序とした。現地表下0.2～0.4m前後では、調査前までの建物基礎によって一部擾乱、あるいは整地（盛土）が行われている。以下各層について記す。

第I層：盛土（整地）および擾乱層（層厚20～40cm）。現地表面はT.P.+9.4m前後を測る。

第II層：暗灰色微砂（層厚10～20cm）。整地層である。灰や焼土塊などがふくまれている。

第III層：暗灰褐色砂質土・灰色シルト（層厚30cm前後）。スライス状にシルトと灰が重層している。

第IV層：褐灰色シルト質土（層厚20～40cm）。

第V層：淡茶灰色細砂混微砂（層厚10～20cm）。遺物が僅かに含まれる。

第VI層：褐灰色砂質土（層厚20cm前後）。土師器や瓦器の小破片が含まれる。炭を少量含む。

第VII層：灰茶色粘土混じり微砂（層厚30cm前後）。平安時代後期～室町時代の土器片などの遺物を含む。

第VIII層：暗灰茶色細砂混シルト（層厚15～25cm）。平安時代後期の土器片などの遺物を含む。

第IX層：淡褐灰色シルト質土（層厚25～30cm）。平安時代後期の土器片などの遺物を含む。

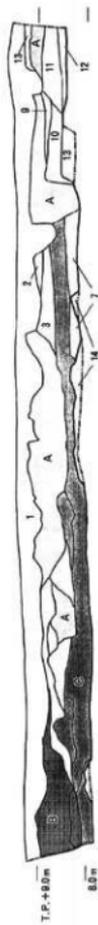
第X層：乳茶灰色シルト（層厚20cm前後）。平安時代後期から鎌倉時代のベース面で、調査区南側のみ堆積する。

第XI層：茶褐色砂礫混細砂（層厚30cm以上）。第X層と同様のベース面で、調査区北側に堆積がみられる。

A層：乳灰茶色細砂（層厚10～130cm）。近世～近代に埋めたとと思われる粒の揃った砂と思われる。あまり締まりがなく柔らかい。

B層：淡灰褐色砂質土（層厚30cm）。近世～近代の水路？の埋土と思われる。

C層：室町時代の堀（SD-1）の埋土。



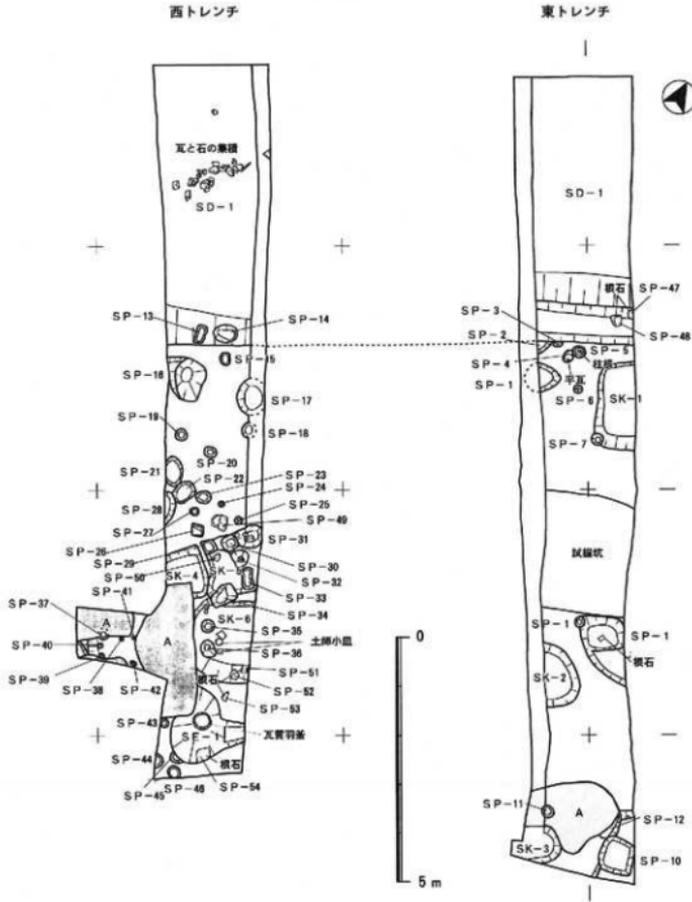
東トレンチ真壁

第4図 断面図



西トレンチ真壁

- | | | |
|----------------|-------|-----------------------|
| 1 礫土・攪乱 | — I | A 近世の礫土 (乳灰茶色細砂) |
| 2 暗灰色細砂 | — II | B 近世~近代の水鏡? (流灰褐色砂質土) |
| 3 暗灰色細砂質土 | — III | C 室戸時代の礫 (SD-1) |
| 4 褐色シルト質土 | — IV | |
| 5 深茶灰色細砂混濁砂 | — V | |
| 6 褐色砂質土 (灰を含む) | — VI | |
| 7 灰茶色粘土混じり微砂 | — VII | |
| 8 暗灰茶色細砂混シルト | | |
| 9 灰褐色砂質土 | | |
| 10 褐色細砂質土 | | |
| 11 淡灰茶色シルト | | |
| 12 灰褐色シルト質土 | — IX | |
| 13 乳茶灰色シルト | — X | |
| 14 茶褐色砂礫混濁砂 | — XI | |



第5図 遺構平面図

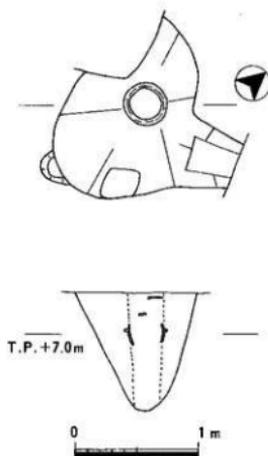
第3節 検出遺構と出土遺物

調査の結果、現地表（T.P.+9.4m前後）F1.1~1.3m（T.P.+8.2~8.4m）前後で平安時代後期~近世にかけて時期の遺構を検出した。遺構は東トレンチで平安時代後期の土坑3基（SK-1~SK-3）・小穴14個（SP-1~SP-12）、室町時代の小穴2個（SP-47・SP-48）である。西トレンチでは平安時代鎌倉時代後期の井戸1基（SE-1）、土坑3基（SK-4~SK-6）・小穴39個（SP-13~SP-46）、室町時代以降の小穴5個（SP-49~SP-53）、東トレンチと西トレンチに続く平安時代~室町時代の溝状遺構1条（SD-1）を検出した。その他、現地表下約0.2~0.4m付近から切込む近世~近代と思われる上坑状の窪みが確認できた。出土遺物量は遺構および遺物包含層内からコンテナ箱にして約8箱分を数える。

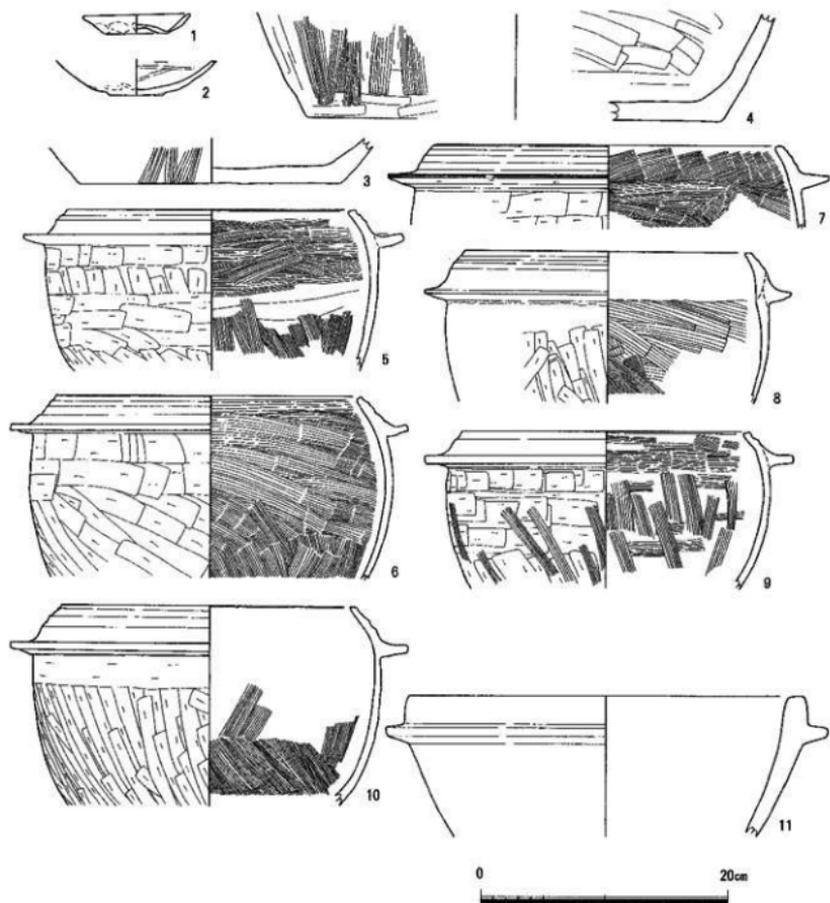
井戸（SE）

SE-1

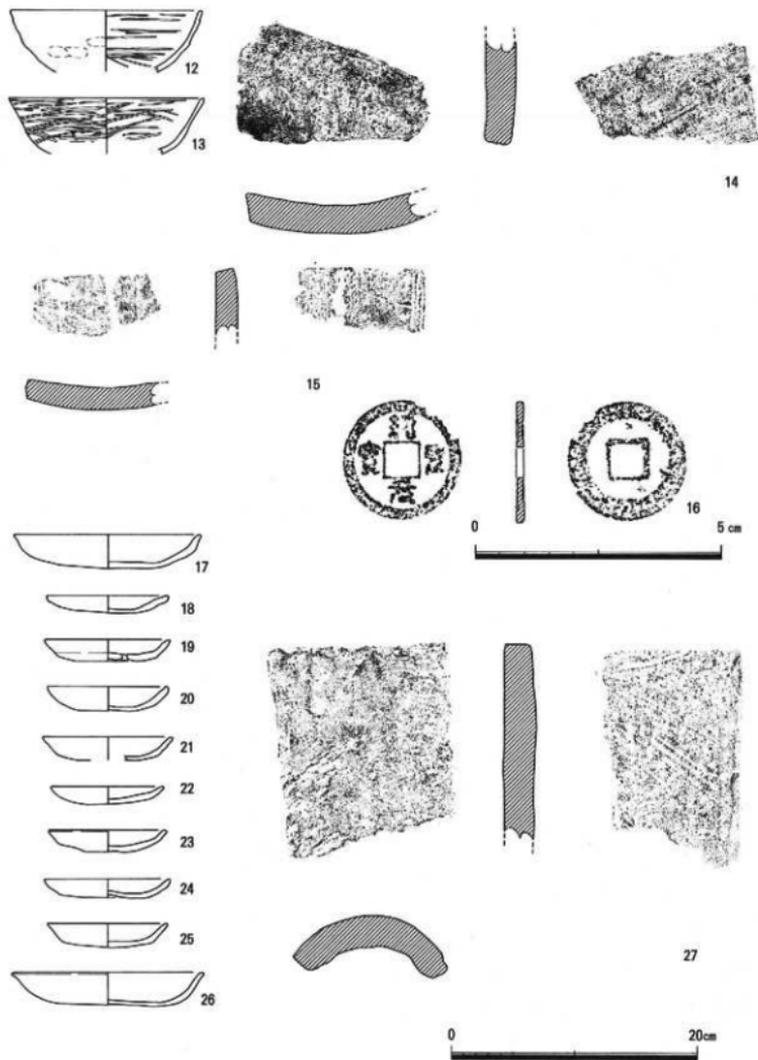
西トレンチ2c~b区で検出した瓦質井戸である。北部は近世以降の砂層が堆積する土坑状の窪みで削られている。東部の一部は調査区外に至るため、全容は不明である。南角一部ではSP-54に切られ、西部ではSP-45を切る関係にある。掘り方の規模は検出部で、東西1.0~1.45m・南北1.58m・深さ0.7mを測る。埋土は暗灰茶褐色砂礫混粘質シルトで、掘り方の検出面より約27cm下部で井戸側としている瓦質羽釜（5）を検出した。瓦質羽釜は2段積みであった。羽釜の底部は穿孔して積み上げている。井戸側内部からは13~14世紀ごろの土師器の鉢・甕、瓦器碗、石鍋などが出土している。図示できたものは11点（1~11）である。（1）は土師器小皿、2は瓦器碗で、浅い碗底に退化した高台が付く。（3・4）は瓦質の甕である。（5~10）は瓦質の羽釜で、体部の外面へラケズリ、内面ハケナデ、鈎から内彎する口縁部にかけてヨコナデの調整がみられる。井戸側に再利用されていたものである。（11）は石製の石鍋である。これらは鎌倉時代後期の時期のものである。



第6図 SE-1 平面断面図



第7図 SE-1出土遺物実測図



第9図 SK-2・SK-6出土遺物実測図

土坑 (SK)

SK-1

東トレンチ4d区で検出した。東部は調査区外に至るため、全容は不明である。南西角ではSP-7を切っている。規模は検出部で、東西0.9m・南北1.8m・深さ0.05~0.1mを測る。埋土は灰褐色砂礫混砂質土である。遺物は出土しなかったが土層から判断すると平安時代後期~鎌倉時代ごろのものと思われる。

SK-2

東トレンチ3c区で検出した。北部は調査区外に至るため、全容は不明である。規模は検出部で、東西1.9m・南北0.6m・深さ約0.07mを測る。埋土は暗灰色粘土質シルトで、内部からは土師器小皿・瓦器椀・平瓦などの破片がわずかに出土している。図示できたものは6点(12~16)である。(12・13)は瓦器椀で、SE-1で出土している瓦器椀よりやや深めの椀である。(14・15)は平瓦である。(16)は紹聖元寶<初鑄造年 北宋 1094年 篆書>の銅銭である。

SK-3

東トレンチ3c区で検出した。北部は近世以降の砂層が堆積する土坑状の窪みで削られている。西部・南部は調査区外に至るため、全容は不明である。規模は検出部で、東西1.0m・南北0.8m・深さ約0.24mを測る。埋土は暗褐色砂質土で、内部からは平安時代後期に比定される土師器の小片が少量出土している。図示できたものは平安時代後期~鎌倉時代にかけての土師器の中皿(17)1点である。

SK-4

西トレンチ2c区で検出した。南部は近世以降の砂層が堆積する土坑状の窪みで削られている。西部は調査区外に至るため、全容は不明である。規模は検出部で、東西0.8m・南北1.06m・深さ約0.1mを測る。埋土は暗褐色砂質土で、内部からは平安時代後期~鎌倉時代に比定される土師器・瓦器椀の小片がごく少量出土している。

SK-5

西トレンチ2c区で検出した。西部はSK-4に切られ、南部はSK-6を切る関係にある。東部は調査区外に至るため、全容は不明である。規模は検出部で、東西1.3m・南北1.4m・深さ0.05m前後を測る。埋土は暗灰褐色砂質シルトで、基底面には柱穴と思われる小穴が6個(SP-29~SP-34)確認できた。内部からは平安時代後期に比定される土師器小皿・瓦器椀などの小片が少量出土している。図示できたものは土師器小皿の4点(18~21)である。(18)は口縁に受け部で平安時代後期ごろの小皿である。(19)には杯底部に焼成後の穿孔がみられる。

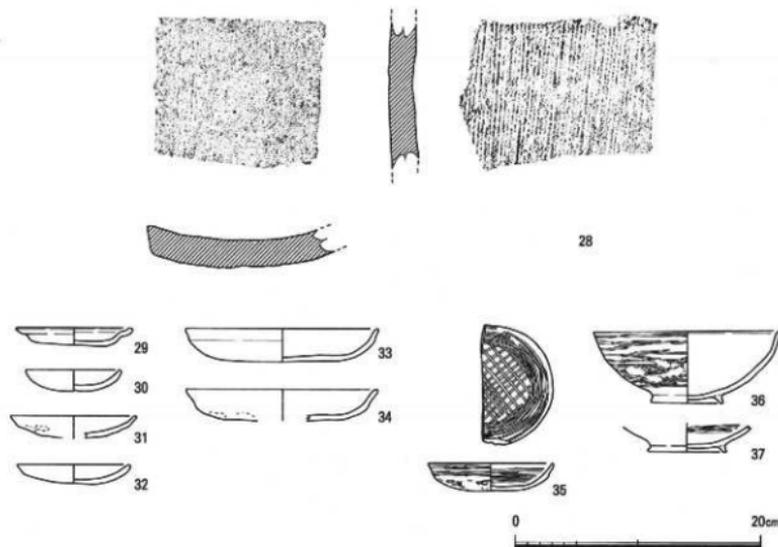
SK-6

西トレンチ2c区で検出した。北部はSK-5に切られ、西部は近世以降の砂層が堆積する土坑状の窪みで削られている。東部は調査区外に至るため、全容は不明である。上部ではSP-51・SP-52を検出している。規模は検出部で、東西1.2m・南北1.8m・深さ0.05~0.1mを測る。埋土は暗灰茶色粘土質シルトである。土坑の南西基底面から柱穴と思われるSP-36を検出した。内部からは平安時代後期に比定される土師器小皿が完形で3点出土した。その他土師器中皿・瓦器椀・平瓦など破片が出土している。図示できたものは6点(22~27)である。(22~25)は土師器小皿、(26)は土師器中皿、(27)は丸瓦で凹面に布目、凸面にヘラケズリがある。

小穴 (SP)

SP-1~SP-53

東トレンチで30個、西トレンチで14個の計54個を検出した (次頁に小穴一覧掲載)。平面形は円形・楕円形・隅丸方形がみられる。大きさは20~40cmぐらいのものが最も多い。小穴から出土している遺物は小穴一覧表の備考に掲載しているとおりでである。図示できたものは10点 (28~37) である。(28) はSP-5から出土した平瓦である。柱の根石として使われていたと思われる。(29~37) はSP-25から出土したもので、(29~34) は土師器で、(29~32) は小皿、(33・34) は中皿である。35~37は瓦器で、35は小皿、(36・37) は碗である。これらの小穴には根石・柱根・柱痕が多くみられることから大半は建物の柱穴跡であると考えられる。しかしこれらの小穴にはレベル差があり時期差があるものと思われる。出土遺物や周辺遺構から平安時代後期~室町時代に至る時期のものであろう。



第10図 SP-25出土遺物実測図

第1表 小穴一覧表

通稱番号	調査区名	区名	平面形	断面形	径	深さ	堆積土	備考
SP-1	西トレンチ	2c区	—	U字形	60	18.5	暗灰褐色粘質シルト	土師小皿・瓦器類
SP-2	"	2c区	—	—	—	6.7	暗灰褐色粘質シルト	
SP-3	"	2c区	楕円形	U字形	12~20	9	暗灰褐色粘質シルト	
SP-4	"	2c区	楕円形	逆台形	19~26	10	暗灰褐色粘質シルト	瓦
SP-5	"	2c区	円形	U字形	24	31.5	暗灰褐色砂混じりシルト	面取りした柱根残存。土師小皿・瓦器類
SP-6	"	2c区	円形	U字形	18	8.6	暗灰褐色細砂混じりシルト	
SP-7	"	2d区	円形	U字形	25	22.1	暗灰褐色微砂混じり粘質土	
SP-8	"	3c区	円形	U字形	23	13.3	暗灰褐色微砂混じり粘質土	
SP-9	"	3d区	—	逆台形	90~130	25.2	灰褐色粘質シルト・茶灰褐色粘質シルト	根石有り
SP-10	"	4d区	隅丸方形	逆台形	70~72	23.2	暗灰褐色微砂混じり粘質土	
SP-11	"	4c区	円形	U字形	25	35.6	暗灰褐色微砂混じり粘質土	
SP-12	"	4d区	—	—	—	23.5	暗灰褐色砂質土	
SP-13	"	2b区	隅丸方形	逆台形	20~38	21.5	暗灰褐色砂混じりシルト	土師小皿・瓦器類
SP-14	"	2b区	楕円形	逆台形	37~47	20.5	暗灰褐色砂混じりシルト	土師器片
SP-15	"	2b区	楕円形	U字形	20~26	10.1	暗灰褐色砂混じりシルト	
SP-16	"	2b区	—	碗形	88	25.2	茶灰色シルト・灰褐色粘質土	土師器土釜・瓦器類
SP-17	"	2b区	円形	皿状形	74	10.7	茶灰色シルト	土師小皿・瓦器類
SP-18	"	2b区	円形	逆台形	32	11.9	茶灰色シルト	
SP-19	"	2b区	円形	U字形	23	7.4	暗灰褐色粘質シルト	
SP-20	"	2b区	円形	U字形	24	11.7	暗灰褐色粘質シルト	
SP-21	"	2b区	楕円形	逆台形	34~62	22.2	暗灰褐色粘質シルト	
SP-22	"	3b区	楕円形	逆台形	37~50	14.8	暗灰褐色粘質シルト	土師小皿・瓦器類
SP-23	"	3b区	楕円形	U字形	26~32	12.9	暗灰褐色粘質シルト	
SP-24	"	3b区	円形	U字形	12	5.5	暗灰褐色粘質シルト	土師小皿
SP-25	"	3b区	円形	U字形	15	5	暗灰褐色粘質シルト	
SP-26	"	3b区	方形	逆台形	24	18.8	暗灰褐色粘質シルト	根石有り。土師小皿・瓦器類
SP-27	"	3b区	円形	U字形	16	4.7	暗灰褐色粘質シルト	
SP-28	"	3b区	—	U字形	68	34.9	暗灰褐色粘質シルト	須恵器類・備前焼
SP-29	"	3b区	隅丸方形	U字形	28	17.3	暗灰褐色粘質シルト	
SP-30	"	3b区	隅丸方形	U字形	30	23.7	暗灰褐色粘質シルト	
SP-31	"	3b区	楕円形	U字形	46~56	20	暗灰褐色粘質シルト	根石有り
SP-32	"	3b区	楕円形	U字形	34	36.7	暗灰褐色粘質シルト	
SP-33	"	3b区	橢圓形	U字形	21~41	13.4	暗灰褐色粘質シルト	
SP-34	"	3b区	隅丸方形	逆台形	38~52	36	暗灰褐色粘質シルト	
SP-35	"	3b区	円形	逆台形	26	4	暗灰褐色粘質シルト	
SP-36	"	3b区	楕円形	逆台形	28~36	16.4	暗灰褐色粘質シルト	
SP-37	"	3b区	楕円形	U字形	20~23	14.6	暗灰褐色粘質シルト	
SP-38	"	3b区	円形	U字形	10	7.2	暗灰褐色粘質シルト	
SP-39	"	3b区	円形	U字形	10	7.6	暗灰褐色粘質シルト	
SP-40	"	3b区	円形	U字形	8	5.1	暗灰褐色粘質シルト	
SP-41	"	3b区	円形	U字形	6	2.6	暗灰褐色粘質シルト	
SP-42	"	3b区	楕円形	U字形	8~14	4.8	暗灰褐色粘質シルト	
SP-43	"	3b区	楕円形	逆台形	17~20	13.2	暗灰褐色粘質シルト	
SP-44	"	4b区	—	逆台形	30	17.1	暗灰褐色粘質シルト	
SP-45	"	4b区	—	U字形	30	10	暗灰褐色粘質シルト	
SP-46	"	4b区	楕円形	逆台形	24~28	5.2	暗灰褐色粘質シルト	
SP-47	"	2d区	—	—	—	—	—	根石(花崗岩)有り

溝 (SD)

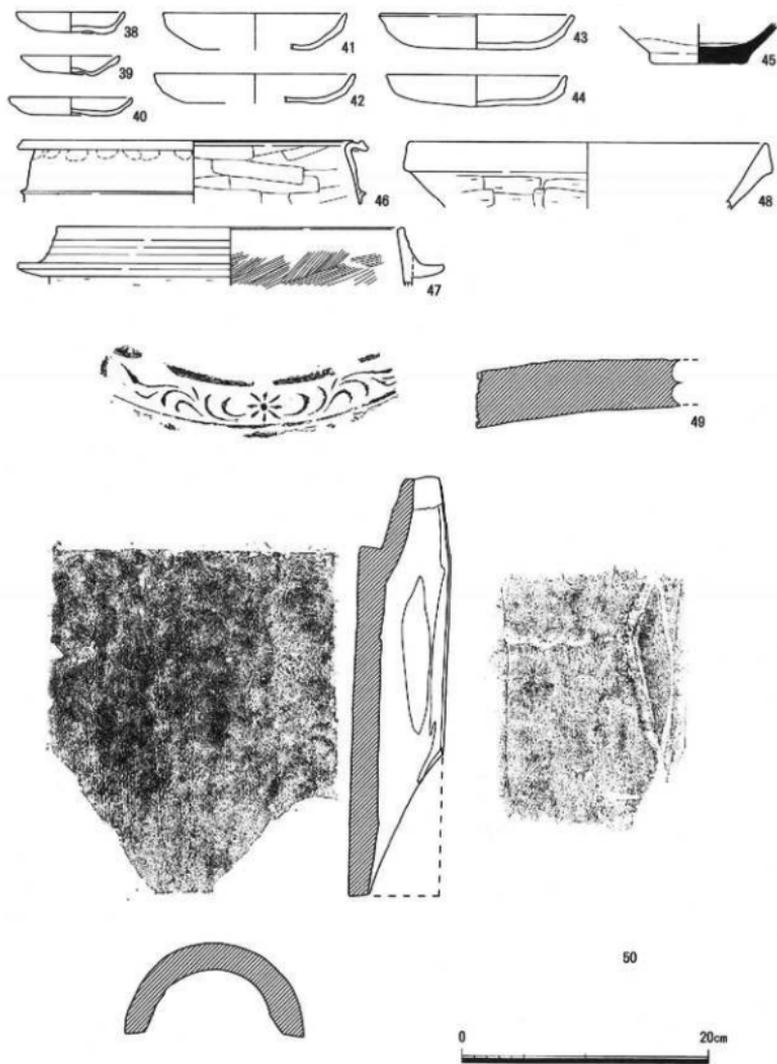
SD-1

東トレンチ北部1・2b区・西トレンチ北部1・2c・b区で検出した。東西方向に伸びる溝状遺構と思われる。検出規模は、全長(東トレンチ・西トレンチ)約10m、幅5.5m前後・深さ0.2~0.6mを測る。埋土は灰色細砂混じり粘質土・暗灰黄色粘土質シルト・灰褐色砂礫混砂質土・褐色粘質シルト・暗灰茶色粘土混細砂・青灰色シルト質粘土である。東トレンチでは北東部で杭1点を確認した。西トレンチでは破棄したと思われる拳人より一回り大きい石(15~30cm位、約50点)と瓦(平瓦[唐草文軒丸瓦]・丸瓦などコンテナ<600×400×200>1箱分)が集積した状態で出土している。その他、平安時代後期~室町時代にかけての土器類(土師小皿・へそ皿・羽釜・瓦器碗・瓦質羽釜・陶磁器・備前焼)がコンテナ2箱分出土した。図示できたものは27点(38~65)である。(38~40)は土師器小皿、(41~44)は土師器中皿、(45)は須恵器の鉢、(46)は土師器の上釜、(47)は瓦質の羽釜、(49~65)は瓦で、(49)は花中唐草文の軒平瓦、(50)は丸瓦、(51~58・64・65)は平瓦で、凹面には布目とヘラナデの2種類がある。凸面はほとんどが縄目で、57だけが斜格子のスタンプである。(59~63)は埴である。

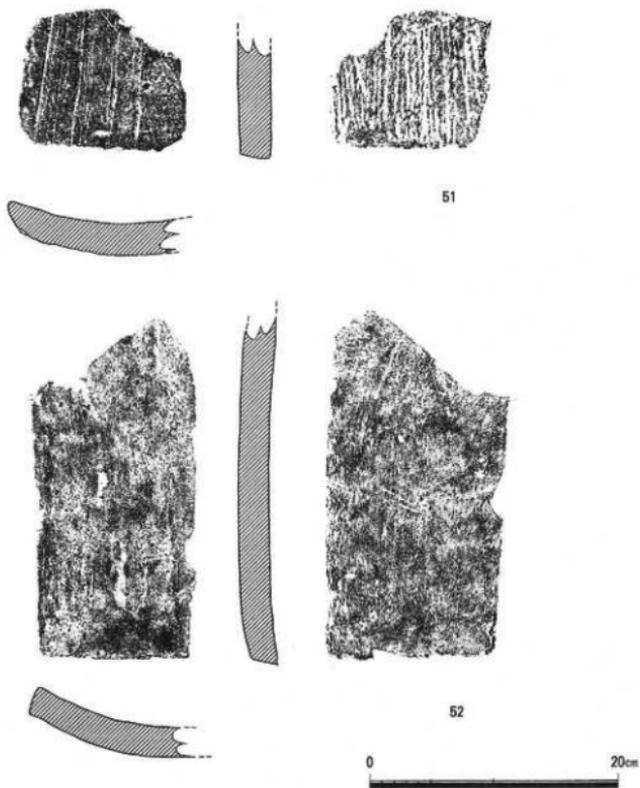
この溝については前掲第2図に表わした現地図と八尾郷絵図(京都大学地理学教室所蔵)から復原した図(「寺内町基本計画に関する研究」より)を合致させた図である。この図では調査区が寺内町北東部の今口門の山口で西郷領にあたる。絵図では道路や環濠がちょうど調査地付近で途切れており、その詳細は不明であるが、この溝は埋没した時期から想定するとその水路(環濠)の一部にあたる可能性が強いものと考えられる。

3) 遺構に伴わない出土遺物

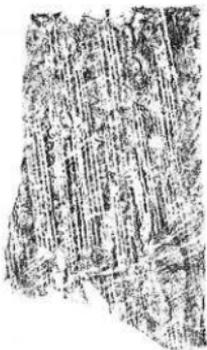
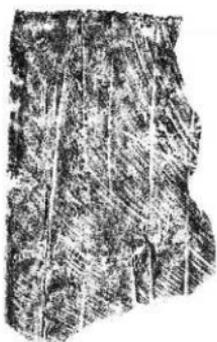
東トレンチ・西トレンチの調査区内よりコンテナ箱にして約4箱を出土した。これらは基本層序の第IV層~第VII層内に含まれていたものである。時間的な余裕がなく各層別に遺物を取り上げることができなかったため、層ごとの詳細な時期は明確にできなかった。出土した遺物は平安時代後期~近世までの時期のものが含まれていた。土器では土師器小皿・中皿・鉢・甕、須恵器甕、瓦器碗・小皿・羽釜、平瓦・丸瓦・陶磁器などがみられた。図示できたものは30点で、東トレンチは14点(66~80)である。(66~71)は土師器の小皿で、(66)は口縁に受け部がみられる占手の小皿である。(72・73)は土師器中皿、(74・75)は瓦器の碗である。(76・77)は土師器の鉢、(78~80)は瓦質で、(78)は鉢で、外面に菊のスタンプがかかる。(79・80)は羽釜である。西トレンチは16点(81~97)で、(81・82)は土師器の小皿、(83・84)は土師器の中皿、(85~95)は瓦器の碗である。(96)は瓦質の鉢で、菊のスタンプがある。(97)は銅銭で熙寧元寶<初鋳造年 北宋 1068年 真書>である。



第11图 SD-1出土遺物実測図1



第12図 SD-1 出土遺物実測図2



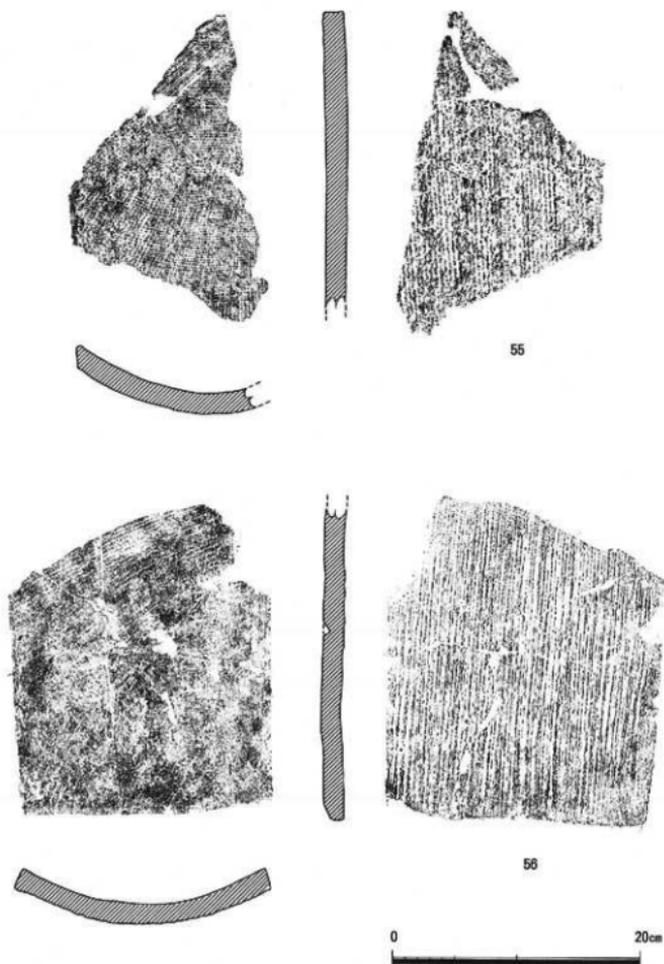
53



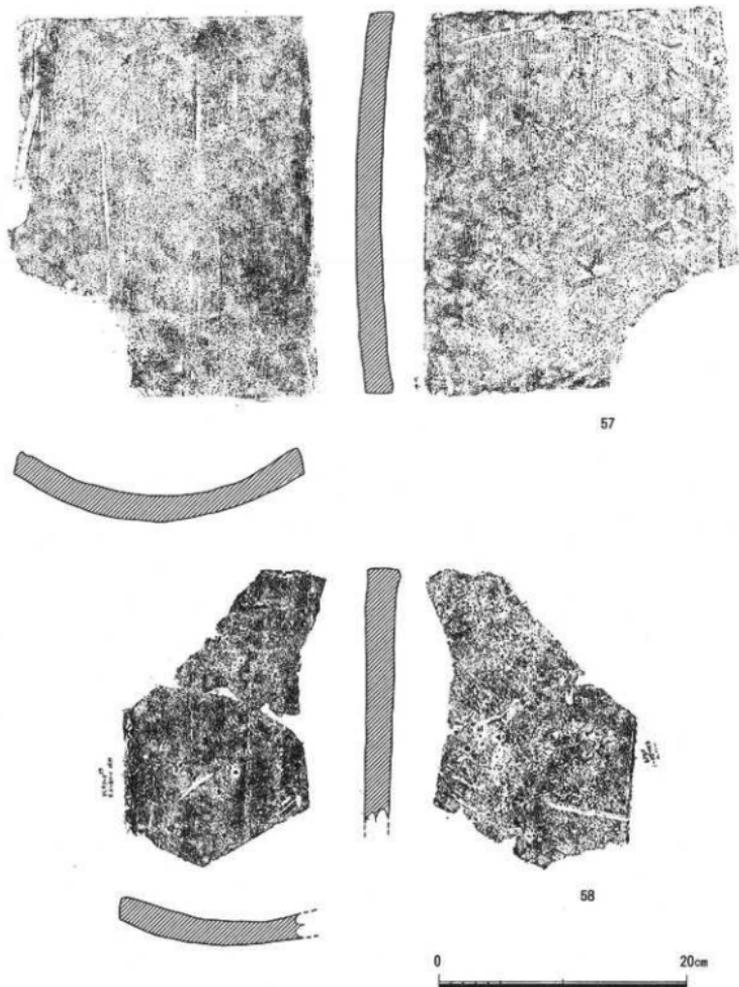
54



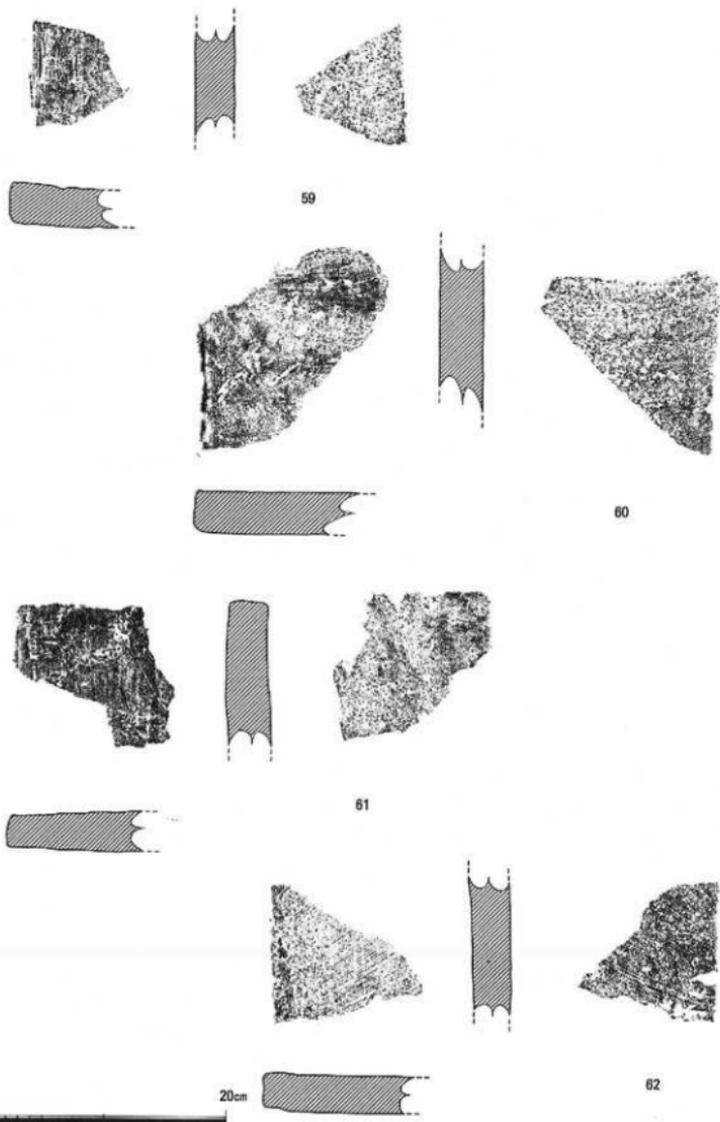
第13圖 SD-1出土遺物実測図3



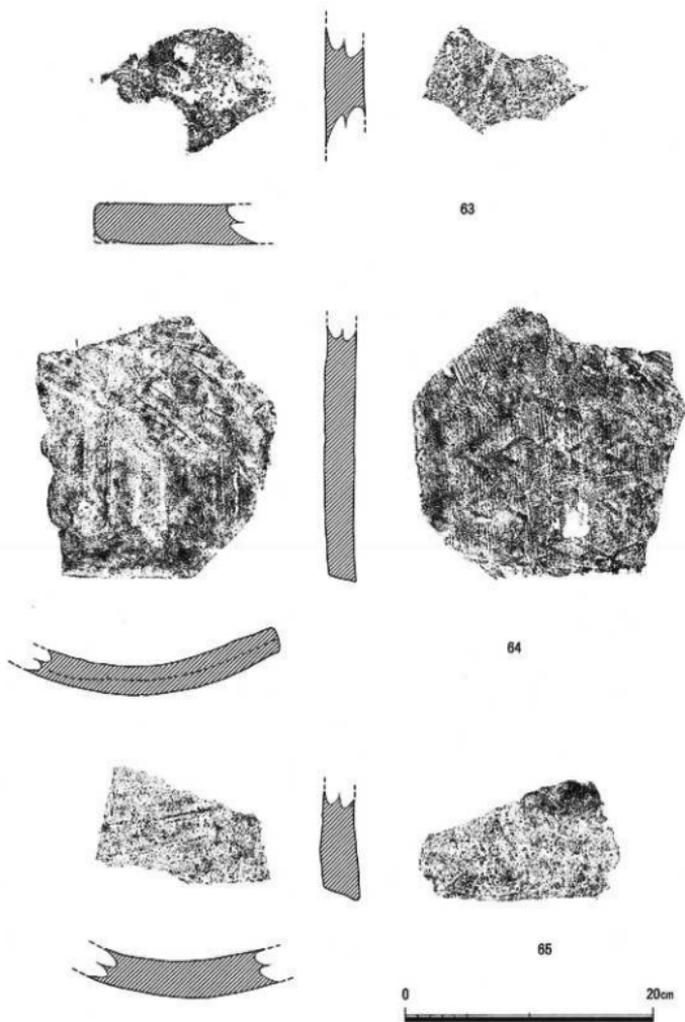
第14図 SD-1出土物実測図4



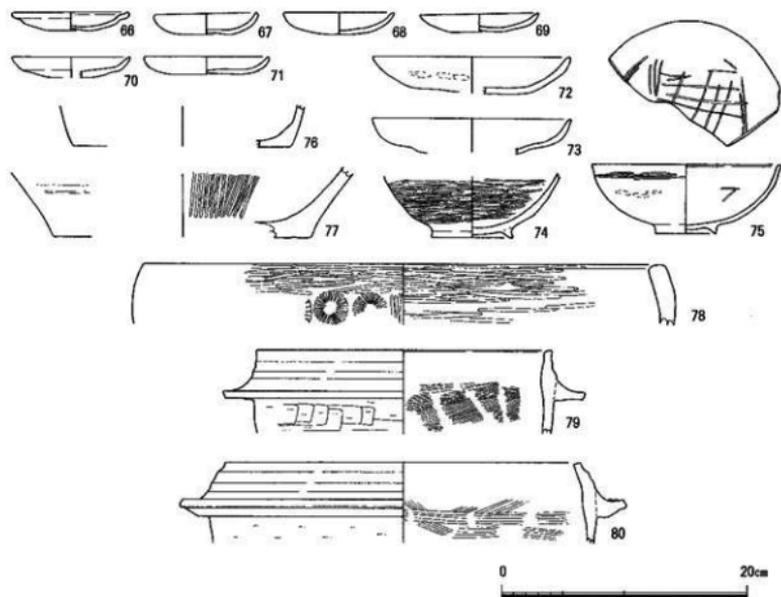
第15圖 SD-1 出土遺物実測図 5



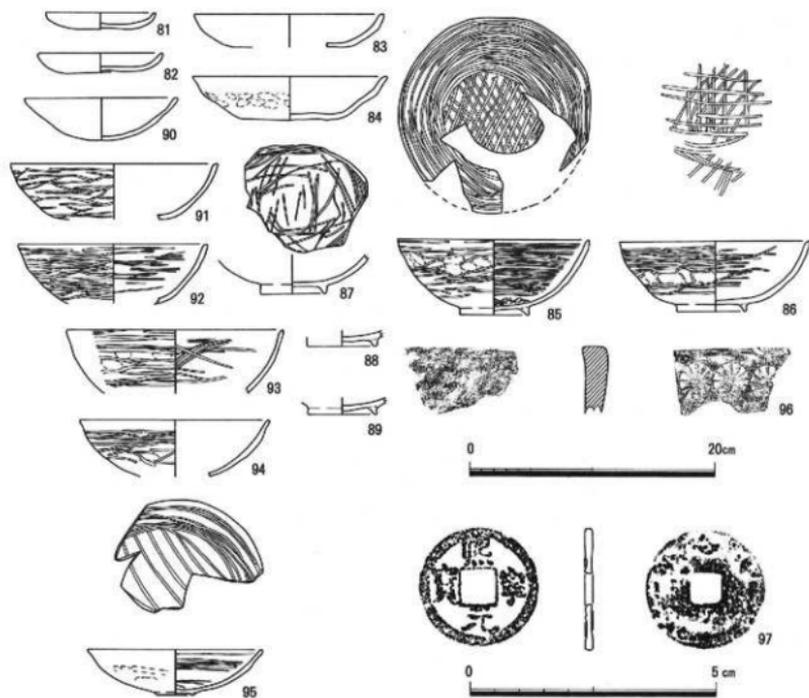
第16図 SD-1出土遺物実測図6



第17图 SD-1 出土遺物実測図7



第18図 東トレンチ出土遺物実測図



第19図 西トレンチ出土遺物実測図

第4節 出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器 種 出土地点	法量 (cm) 口径 器高	調整・技法等の特徴	色 調	胎 土	焼成	遺存状況	備考
1	土師器小皿 西トレンチ SE-1	口径 8.2 器高 1.6	外面: ヨコナデ、ナデ、指頭 片痕残存 内面: ヨコナデ	淡黄灰茶色	精良	良好	完形	
2	瓦器輪 西トレンチ SE-1	底径 4.2	外面: ナデ、指頭片痕残存 内面: ナデ後ヘラミガキ	淡青灰色	2mm以下の砂 粒を微量に含 む	良好	1/5	
3	瓦器鉢 西トレンチ SE-1	底径 20.8	外面: ヘラミガキ、底部ヘラ ミガキ 内面: ヘラナデ	外 暗灰茶褐色 内 青灰黒色	2mm以下の砂 粒を少量含む	良好	底体部一 部	
4	土師器鉢 西トレンチ SE-1	底径 33.2	外面: ヘラケズリ後ハケナデ、 底部ヘラケズリ 内面: ヘラナデ	暗茶赤褐色	7mm以下の砂 粒を多量に含 む	良好	底体部一 部	
5	瓦質羽釜 西トレンチ SE-1	口径 23.0 口径 36.0	外面: 口縁部ヨコナデ、体部 ヘラケズリ 内面: ハケナデ	暗茶黒褐色	5mm以下の砂 粒を多量に含 む	良好	2/3	下部煤 付着
6	瓦質羽釜 西トレンチ SE-1	口径 24.5 口径 32.2	外面: 口縁部ナデ、体部ヘラ ケズリ 内面: 口縁部ナデ、体部ハケ ナデ	内 暗灰色 外 黒色 (上 部 灰色)	1~2mmの砂 粒を多量に含 む	良好	1/2	煤付着 炭化物 付着
7	同上	口径 27.4 口径 35.4	外面: 口縁部ナデ、体部ヘラ ケズリ 内面: 口縁部ハケナデの後指 頭止痕残存、体部ヘラケズリ	灰色	1~2mmの砂 粒を含む	良好	1/8	
8	同上	口径 23.0 口径 29.6	口縁部内外面: ユビナデ、体 部外面ヘラケズリ 内面: ハケナデ	暗青灰色	1~2mmの砂 粒を含む	良好	1/4	把手の つなぎ 目あり
9	同上	口径 23.0 口径 29.0	外面: 口縁部ヨコナデ、体部 上位ヘラケズリ、体部ヘラケ ズリ後ハケナデ10本/cm 内面: ハケナデ9本/cm口縁 上部ナデ	暗灰茶褐色	4mm以下の砂 粒を多量に含 む	良好	2/3	
10	同上	口径 23.7 口径 32.3	外面: 口縁部ナデ、体部ヘラ ケズリ 内面: ナデ、下部ハケナデ	外 暗灰色・ 灰白色 内 灰色	1~2mmの砂 粒を含む	良好	7/8	煤付着
11	石磨 西トレンチ SE-1	口径 31.6 口径 35.4	外面: 研磨による工具痕あり 内面: 研磨による工具痕あり	淡灰色	滑石		一部	煤付着
12	瓦器輪 東トレンチ SK-2	口径 15.4	外面: ヘラミガキ (暗文) あり 地ナデ、指頭止痕残存 内面: ヘラミガキ (暗文) 見 込みみ平行状のヘラミガキ (暗文) あり	外 淡灰色 内 黒灰色	精良	良好	1/5	
13	同上	口径 15.6	内外面: ヘラミガキ、暗文	淡灰褐色~乳 灰色	同上	良好	1/5	
14	平瓦 東トレンチ SK-2	厚さ 2.3	凹面: ヘラナデ 凸面: 繻目	明橙茶色~乳 灰色	4mm以下の砂 粒を多量に含 む	良	一部	
15	平瓦 東トレンチ SK-2	厚さ 1.9	凹面: 布目 凸面: 繻目	乳橙茶灰色	3mm以下の砂 粒を多量に含 む	良	一部	
16	銅銭 東トレンチ SK-2	長径 2.5	中心に1辺5.5mmの穴あり	暗青灰色	銅		完形	昭聖元 寶

遺物番号 図版番号	器種 出土地点	法量 (cm) 口径 器高	調整・技法等の特徴	色調	胎土	焼成	遺存状況	備考
17	土師器中皿 西トレンチ SK-3	口径 15.0 器高 2.8	内外面：ヨコナデ、ナデ	淡灰褐色色	2mm以下の砂粒を少量含む	良好	2/3	
18	土師器小皿 西トレンチ SK-5	口径 9.6 器高 1.4	外面：ヨコナデ、ナデ 内面：ナデ	乳橙茶灰色～ 白灰色	2mm以下の砂粒を微量に含む	良好	完形	
19	同上	口径 10.0 器高 1.8	外面：ヨコナデ、ナデ 内面：ナデ、穿孔あり	淡灰橙茶色	1mm以下の砂粒を微量に含む	良好	1/2	
20	同上	口径 9.8 器高 2.0	外面：ヨコナデ、ナデ 内面：ナデ	淡灰茶色	精良	良好	完形	
21	同上	口径 10.4	同上	淡灰茶色	精良	良好	1/3	
22	土師器小皿 西トレンチ SK-6	口径 9.0 器高 1.5	同上	淡橙茶灰色	2mm以下の砂粒を微量に含む	良好	完形	
23	同上	口径 9.3 器高 1.8	同上	淡灰茶色	同上	良好	完形	
24	同上	口径 10.0 器高 1.6	内外面：ナデ、ヨコナデ	淡灰茶色	1mm以下の砂粒を微量に含む	良好	2/3	
25	同上	口径 9.6 器高 2.0	同上	外 淡灰茶色 内 淡灰茶色～ 灰褐色	2mm以下の砂粒を多量に含む	良好	1/4	
26	土師器中皿 西トレンチ SK-6	口径 15.2 器高 1.7	外面：ヨコナデ、ナデ、下部 (指頭圧痕残存) 内面：ヨコナデ、下部ナデ	淡灰茶色	2mm以下の砂粒を微量に含む	良好	完形	
27	丸瓦 西トレンチ SK-6	厚み 2.6	凸面：ヘラケズリ 凹面：布目	凹面 灰黒褐色 凸面 灰黒褐色～ 淡橙茶褐色	5mm以下の砂粒を多量に含む	良好	7/8	
28	平瓦 東トレンチ SP-4	厚さ 2.0	凸面：縄目 凹面：布目あり	淡青灰褐色	4mm以下の砂粒を多量に含む	良	一部	
29	土師器皿 西トレンチ SP-25	口径 9.0 器高 1.5	内外面：ヨコナデ、ナデ	淡茶灰色	1mm以下の砂粒を微量に含む	良好	2/3	
30	同上	口径 7.6 器高 1.7	同上	淡灰茶色	1mm以下の砂粒を微量に含む	良好	1/4	
31	同上	口径 10.2	内外面：ヨコナデ、外面に指頭圧痕残存	淡灰褐色～乳 灰茶色	3mm以下の砂粒を微量に含む	良好	2/5	
32	同上	口径 9.0 器高 1.6	内外面：ヨコナデ、ナデ	淡橙茶灰色	1mm以下の砂粒を微量に含む	良好	ほぼ完形	
33	同上	口径 15.4 器高 2.7	同上	淡灰茶色	1mm以下の砂粒を微量に含む	良好	2/3	
34	土師器小皿 西トレンチ SP-25	口径 15.4	同上	乳黄灰茶色	1mm以下の砂粒を少量含む	良好	1/3	
35	瓦器小皿 西トレンチ SP-25	口径 10.0 器高 2.2	外面：ヘラミガキ、指ナデ後 ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ 見込み斜め 格子状ヘラミガキ	暗灰色	精良	良好	1/2	

遺物番号 図版番号	器 種 出土地点	法量 (ca) 口径 器高	調整・技法等の特徴	色 調	胎 土	焼成	遺存状況	備考
36	瓦器輪 西トレンチ SP-25	口径 15.0 器高 6.0 高台径 5.6	外面：ヘラミガキ、指頭圧痕 残存、下部ヨコナデ、底部ナ デ 内面：ヨコナデ、ナデ	青灰黒色～乳 灰色	精良	良好	2/3	
37	同上	高台径 6.0	外面：ナデ他ヨコナデ、ナデ 内面：ヘラミガキ（暗文）、 見込みに斜格子状のヘラミガ キ（暗文）	外 淡灰褐色 内 黒灰色	精良	良好	底完	
38	土師器皿 東トレンチ SD-1	口径 8.6 器高 1.7	外面：底部ナデ、口縁部ヨコ ナデ 内面：底部ナデ、口縁部ヨコ ナデ	淡灰茶褐色	精良	良好	完形	
39	土師器小皿 西トレンチ SD-1	口径 7.8 器高 1.4	外面：底部ナデ、口縁部ヨコ ナデ 内面：ナデ	外 褐灰色～ 淡灰茶色 内 褐色	1mm以下の砂 粒を微量に含 む	良好	完形	
40	土師器皿 東トレンチ SD-1	口径 9.8 器高 1.5	外面：底部ナデ、口縁部ヨコ ナデ 内面：底部ナデ、口縁部ヨコ ナデ	淡茶灰色	1mm以下の砂 粒を少量含む	良好	1/4	
41	土師器中皿 東トレンチ SD-1	口径 14.8 器高 3.0	同上	乳橙灰茶色	1mm以下の砂 粒を微量に含 む	良好	1/3	
42	同上	口径 16.0 器高 2.4	同上	淡灰茶色	1mm以下の砂 粒を微量に含 む	良好	1/4	
43	同上	口径 15.4 器高 2.8	外面：底部ナデ、口縁部ヨコ ナデ、指頭圧痕あり 内面：底部ナデ、口縁部ヨコ ナデ	淡灰茶色	2mm以下の砂 粒を微量に含 む	良好	2/3	
44	同上	口径 14.4 器高 2.5	外面：底部ナデ、口縁部ヨコ ナデ 内面：底部ナデ、口縁部ヨコ ナデ	淡橙茶灰色	2mm以下の砂 粒を少量含む	良好	2/3	
45	白磁碗 東トレンチ SD-1	口径 6.6	外面：上位：回転ナデ（上葉 付着）高台径内：回転ナデ 内面：ナデ（上葉付着）	外 乳灰色～ 淡緑灰色 内 淡緑灰色	精良	良好	底部1/ 2	
46	土師質羽釜 東トレンチ SD-1	口径 27.4	外面：口縁部と肩部にある凸 線までヨコナデ 内面：ナデ、口縁部ヨコナデ	淡灰茶色	1mm以下の砂 粒を微量に含 む	良好	口縁部 1/4	
47	瓦質羽釜 東トレンチ SD-1	口径 28.0 脚径 34.6	外面：口縁部：ナデ脚部：ヘ ラケズリ 内面：ハケナデ（5本/cm） 口縁部：ナデ	黒灰色	3mm以下の砂 粒を多量に含 む	良好	口縁部 1/4	煤付着
48	瓦質鉢 東トレンチ SD-1	口径 28.8	外面：口縁部ハクリのため調 整不明瞭、体部ヘラケズリ 内面：ハクリの調整不明瞭	黒灰色	3mm以下の砂 粒を少量に含 む	良	口縁部 1/8	
49	軒平瓦 西トレンチ SD-1	厚さ 4.45	凹面：布目あり、瓦当付近に 横方向の板ナデ 凸面：縦方向の板ナデ、瓦当 付近に横方向のナデ	凹面 灰色 凸面 灰色	1～4mmの砂 粒を含む	良好	1/3	
50	丸瓦 西トレンチ SD-1	厚さ 2.15 縦幅 34.1 横幅 14.5 高さ 7.5	凹面：布目あり、端部ナデ 凸面：タタキのち横方向のナ デ	凹面 暗灰色 凸面 暗灰色 部分的に灰白	1～3mmの砂 粒を含む	良好	5/6	煤付着

遺物番号 図版番号	器種 出土地点	法量 (cm) 口径 器高	調整・技法等の特徴	色調	胎土	焼成	遺存状況	備考
51	平瓦 西トレンチ SD-1	厚さ 2.6	凹面: 布目ありのちへラナデ、 端部へラナデ (V字状の痕あり) 凸面: 襷目あり	凹面 灰色 凸面 暗灰色	1~4mmの砂 粒を含む	良好	1/6	
52	平瓦 東トレンチ SD-1	厚さ 2.45	凹面: 布目ありのちナデ 凸面: 襷目ありのちナデ	凹面 灰色 凸面 灰色 大部分灰黄色	1~4mmの砂 粒を含む	良好	1/3	
55	同上	厚さ 1.7	凹面: 布目あり、一部工具痕 (板状へラ) が左ナナメ方向 にあり、端部へラナデのちユ ピナデ 凸面: 粗い襷目あり	凹面 暗灰色 凸面 暗青灰 色	1~6mmの砂 粒を含む	良好	1/4	
56	同上	厚さ 1.56 横幅 20.7	凹面: 布目ありのち左ナナメ 方向のナデ、端部ナデ 凸面: 襷目あり	凹面 暗灰色 凸面 灰白色	1~4mmの砂 粒を含む	良好	3/4	
57	同上	厚さ 2.15	凹面: 縦方向の板ナデのち狭 端付近に横方向のナデ、端部 ナデ 凸面: 襷目	凹面 灰色 凸面 灰色	1~3mmの砂 粒を含む	良好	7/8	
58	平瓦 東トレンチ SD-1	厚さ 2.0	凹面: 縦方向のナデ、端部ナ デ 凸面: タタキのちナデ、接合 痕あり	凹面 淡灰褐 色 凸面 淡灰褐 色	4mm以下の砂 粒を多量に含 む	良好	1/4	
59	塼 西トレンチ SD-1	厚さ 3.3	凹面: ナデ、窪みに布目あり、 端部ナデ 凸面: ナデ	凹面 におい 黄色 凸面 灰黄色	1~8mmの砂 粒を含む	良好	1/8	
60	同上	厚さ 3.5	凹面: 布目あり、端部ナデ 凸面: ナデ	凹面 浅黄色・ 黄灰色 凸面 灰色	1~4mmの砂 粒を含む	良好	1/6	
61	同上	厚さ 3.2	凹面: 布目ありのちナデ、端 部ナデ 凸面: ナデ	凹面 淡黄色 と灰黄色 凸面 浅黄色	1~4mmの砂 粒を含む	良好	1/6	
62	SE-1	厚さ 3.0	凹面: 粗い板ナデ (左ナナメ 方向) (製作時使用した布の 端部痕あり) 端部: ナデ凸面粗い板ナデ (右ナナメ方向) はなれ砂。	凹面 灰色 凸面 灰色	1~4mmの砂 粒を含む	良好	1/8	
63	同上	厚さ 3.1	凹面: 板ナデ、端部ナデ 凸面: 左ナナメ方向の板ナデ	凹面 黄灰色 凸面 黄灰色	1~3mmの砂 粒を含む	良好	1/8	
64	平瓦 西トレンチ SD-1	厚さ 2.3	凹面: 縦方向のち右ナナメ方 向のナデ、狭端山ナデ側面ナ デ 凸面: タタキのち一部右ナナ メ方向の板ナデ (粘土の重ね 合わせ痕あり)	凹面 におい 黄褐色 凸面 灰黄色	1~4mmの砂 粒を含む	良好	1/4	
65	同上	厚さ 3.0	凹面: 板ナデ (砂粒を多量に 含む)、狭端部ナデ 凸面: 布目、ナデ	凹面 灰色 凸面 灰色	1~4mmの砂 粒を含む	良好	1/6	
66	土師器小皿 東トレンチ 包舎橋	口径 9.2 器高 1.5	外面: ヨコナデ、ナデ 内面: ナデ	淡黄灰色	1mm以下の砂 粒を微量に含 む	良好	1/2	
67	同上	口径 8.2 器高 1.8	内外面: ヨコナデ、ナデ	淡茶灰色	1mm以下の砂 粒を微量に含 む	良好	2/3	
68	同上	口径 8.8 器高 1.8	外面: ヨコナデ、ナデ 内面: ナデ	乳白色	1mm以下の砂 粒を微量に含 む	良好	2/3	

遺物番号 図版番号	器種 出土地点	法量 (cm) 口径 器高	調整・技法等の特徴	色調	胎土	焼成	遺存状況	備考
69	同上	口径 9.6 器高 1.6	同上	乳橙茶色	2mm以下の砂粒を微量に含む	良好	2/3	
70	同上	口径 9.4 器高 1.7	外面：ヨコナデ、ナデ 内面：ナデ	淡灰茶褐色	1mm以下の砂粒を微量に含む	良好	2/5	
72	土師器中皿 東トレンチ 包含層	口径 15.8 器高 3.0	内外面：ナデ、ヨコナデ、外面に指頭圧痕あり	乳茶灰色	精良	良好	1/4	
73	同上	口径 16.0	内外面：ナデ、ヨコナデ	外 淡黄茶灰 内 淡灰色	5mm以下の砂粒を少量含む	良好	1/4	
74	瓦器輪 東トレンチ 包含層	高台径 6.4	外面：ヘラミガキ、下部ヨコナデ、底部ナデ、中央部接合痕あり 内面：ヘラミガキ	外 暗灰黒色 内 暗灰黒色	精良	良好	1/4	
75	同上	口径 15.2 器高 5.7 高台径 4.8	外面：口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ、下部ナデ高台部ヨコナデ、ナデ、指頭圧痕残存 内面：ヘラミガキと思われるが摩耗の為調整不明瞭見込みに格子状のヘラミガキ	外 淡灰褐色 内 淡灰褐色	精良	良好	1/3	
76	土師器鉢 東トレンチ 包含層	底径 17.4	外面：回転ヘラケズリ、底部ナデ 内面：回転ナデ	淡灰褐色	2mm以下の砂粒を少量含む	良好	一部	
77	同上	底径 20.6	外面：回転ナデハラ裏有り底部穴縁有り 内面：すり口下部ナデ	暗橙茶褐色～明茶褐色	3mm以下の砂粒を少量含む	良好	一部	
78	同上	口径 42.2	内外面：ヘラミガキ外面に菊の花文のスタンプあり	淡灰色～乳灰色	2mm以下の砂粒を少量含む	良好	一部	
79	瓦質羽釜 東トレンチ 包含層	口径 23.8 口径 29.4	外面：口縁部内ヨコナデ、体部上位ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ、体部上位ハケナデ	外 乳灰茶色 内 黒灰色	精良	良好	口縁部	煤付着
80	同上	口径 28.8 口径 36.4	外面：口縁部内ヨコナデ、体部上位ヘラケズリ煤付着 内面：ハケナデ、口縁部ナデ	黒灰色	3mm以下の砂粒を多量に含む。8mmの石一つ含む。	良好	口縁一部	
81	土師器小皿 西トレンチ 包含層	口径 8.8 器高 1.3	内外面：ヨコナデ、ナデ	外 淡茶灰色 内 淡茶灰色～淡橙茶色	1mm以下の砂粒を微量に含む	良好	1/2	
82	同上	口径 9.8 器高 1.7	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ、ナデ	淡灰橙茶色	1mm以下の砂粒を微量に含む	良好	ほぼ完形	
83	土師器中皿 西トレンチ 包含層	口径 15.2 器高 2.7	内外面：ヨコナデ、ナデ	淡灰茶色	2mm以下の砂粒を微量に含む	良好	1/3	
84	同上	口径 15.6 器高 3.6	外面：ヨコナデナデ、指頭圧痕残存 内面：ヨコナデナデ	淡橙灰白色	3mm以下の砂粒を微量に含む	良好	1/4	
85	瓦器輪 西トレンチ 包含層	口径 15.5 器高 6.1 高台径 5.5	外面：ヘラミガキ（暗文） 内面：ヘラミガキ（暗文）見込みに斜格子のヘラミガキ（暗文）高台部ヨコナデ、ナデ	暗灰黒色	精良（4mmの石一つ含む）	良好	2/3	

遺物番号 図版番号	器 種 出土地点	法量 (cm) 口径 器高	調整・技法等の特徴	色 調	胎 土	焼成	遺存状況	備考
86	同上	口径 14.2 器高 5.8 高台径 4.99	外面：ヘラミガキ（暗文）、 指頭圧痕残存 内面：ヘラミガキ（暗文）見 込みに平行と斜格子のヘラミ ガキ（暗文）を有す。高台部 ヨコナデ、ナデ	暗灰黒色	2mm以下の砂 粒を微量に含 む	良好	1/4	
87	瓦器鉢 西トレンチ 包含層	高台径 5.0	内外面：ヨコナデ、ナデ（暗 文）、下部の高台部ナデ	黒灰色	精良	良好	底完形	
88	同上	高台径 5.4	外面：ヨコナデ、ナデ 内面：ヘラミガキ（暗文）	黒灰色	精良	良好	同上	
89	同上	高台径 5.4	外面：ヨコナデ、高台径内ナ デ 内面：ヘラミガキ	乳灰色～黒灰 色	精良	良好	底完形	
90	同上	口径 12.2 器高 3.5	内外面：ヨコナデ、ナデ	明赤橙色～淡 青灰色	3mm以下の砂 粒を少量に含 む	良好	2/3	
91	同上	口径 16.6	外面：ヘラミガキ（暗文） 内面：ヘラミガキ見込みに斜 格子の暗文あり	暗灰黒色	3mm以下の砂 粒を少量に含 む	良好	1/3	
92	同上	口径 15.2	内外面：ヘラミガキ	外 黒色～淡 灰色 内 黒色	精良2mmの石 一つ含む	良好	1/2	
93	同上	口径1 7.4	外面：ヘラミガキ（暗文）指 頭圧痕残存 内面：ヘラミガキ（暗文）	暗灰黒色	精良	良好	1/5	
94	同上	口径 15.2	外面：口縁部ヨコナデ、体部 横方向のヘラミガキ（暗文） 内面：ヘラミガキ（暗文）、 下位見込みに平行・斜格子の 暗文あり（ヘラミガキ）	淡灰色	精良	良好	1/5	
95	同上	口径 14.0 器高 3.7 底径 3.0	外面：ヨコナデ指ナデ後ナデ 指頭圧痕指ナデ残存 内面：ヘラミガキ（暗文）見 込みに平行状の暗文あり	黒灰色	3mm以下の砂 粒を微量に含 む	良好	1/3	
96	土師器鉢 西トレンチ 包含層	口縁厚み 2.0	内外面：ヘラミガキ、内面に 菊花文のスタンプあり	外 乳灰色～ 淡灰色 内 淡灰色	精良	良好	口縁一部	
97	銅鏡 西トレンチ 包含層	長径 2.5 短径 0.15	中心に1辺5.5mmの正方形を なす穴あり。	緑灰色	-		完形	熊澤元 寅

第3章 まとめ

今回の調査では、平安時代後期～鎌倉時代前期、室町時代の時期のものを検出することができた。以下、時代ごとに記す。

平安時代後期～鎌倉時代前期

今回の調査では遺構および山上遺物ともに大半がこの時期のものであった。この時期のものは東部に隣接する東郷遺跡でも検出している（第1図参照）。当地から東部へ150mの東郷遺跡第30次調査（TG89-30）、北東部へ150mの東郷遺跡第34次調査（TG90-34）では建物跡・井戸や建物の柱穴と思われる小穴・溝などの住居に伴う遺構とともに日常雑器類が多数出土している。しかし、当地では日常雑器とともに多数の瓦片を出土しており、屋敷跡または寺跡などの建物跡があったことが想定される。この時代は八尾寺内町が成立する以前にあたり、古くからこの地は開かれていたことが再確認された。

室町時代

この時代は当地北側に接する常光寺がある。この寺は八尾地藏で有名な寺で、初口山と号し、臨済宗南禅寺金地院末である。現在でも毎月28日には「おたいや」といい、出店が出てにぎわっている。

調査区内における堆積土層の観察では、東トレンチの堆積層が人為的な埋土状況であることが窺われる。西トレンチでは井戸・根石・溝などの遺構を検出しており、住居区域であることは確実である。検出された遺構は寺内町が形成された時期にあたる。『河内国若江郡八尾郷絵図』（京都大学文学部地理学教室蔵）と現在の地図を重ね合わせると、当地は八尾寺内町区域の北東部の今口門付近にあたる西郷領側に入るが、寺内町をめぐる水路が今回の調査区内で検出された溝（SD-1）がその一部にあたるものと思われ、絵図にみる水路（環濠）が北東部へ続いていることが今回の調査で確認された。この溝については櫻井敏雄氏が執筆された「寺内町の基本計画に関する研究」に報告されている八尾寺内町の構成から推測すると、八尾寺内町南西部の長瀬川より環濠へ取水された後、寺内町北側で流出する沢の川のひとつと思われる。

近世においては、基本層序でA層として記載しているのがそれにあたるものと思われる。A層は人為的に埋められた砂層と考えられる。平面形状では調査区が小規模のため確認することができなかったが大きく深く土坑状に窪んでいた。北接する「常光寺」に関連するものか、それとも「八尾城」に関連するものかは定かではないが、その残存であることは確かであろう。

以上、今回の調査結果について概説した。発掘調査では小面積であったが現八尾寺内町の直面下を調べられたことは大変有意義なことである。また、平安時代後期ごろまで溯れることが確認されたことは大きな成果であったといえる。八尾寺内町に残る文献とは異にする貴重な考古学的資料を得ることができた。

参考文献

- ・櫻橋利光著 1981『大阪市・市史双書1 八尾・柏原の歴史』松籟社
- ・八尾郷土文化研究会 1987『新版 八尾の史跡』八尾市市長公室公報課

- ・八尾市役所 1988『八尾市史（前近代）本文編』八尾市史編集委員会
- ・櫻井敏雄・大草一憲 1988『寺内町の基本計画に関する研究 -久宝寺寺内と八尾寺内を中心として-』八尾市教育委員会
- ・西村公助 1995「I 東郷遺跡（第30次調査）」『東郷遺跡 財団法人八尾市文化財調査研究会報告48』（財）八尾市文化財調査研究会報告
- ・原田昌則 1991「7. 東郷遺跡第34次調査（TG90-34）」『平成2年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会報告

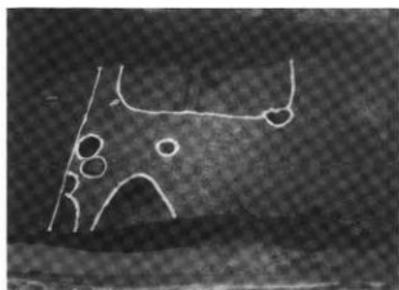
图 版



東トレンチ全景 (南から)



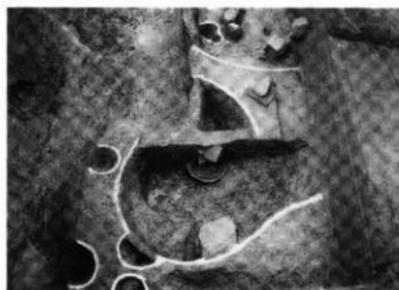
東トレンチ全景 (北から)



東トレンチ北部 (西から)



西トレンチ全景 (南から)



西トレンチ SE-1 (南から)



西トレンチ SK-5他 (西から)